納札と俗信

集古庵

西垣文庫
文庫10
8673

納札と俗信

金川志ん馬著

納札と俗信

版元　旅の趣味會

題字 太田擶朝
装幀 志ん万
筆耕印刷 磯部鎮雄
製本 富田製本所
用紙 小津商店
同 蔦屋紙店

納札と俗信

目次

花山法皇 三〇頁
廻國順禮の由來 三三頁
巡禮の名稱 三三頁
巡禮の種類 三四頁
巡禮の人物 三五頁
巡禮の納札 三六頁
巡拜 三七頁
御詠歌 三七頁
西國巡禮の起原 三八頁
四國八十八ヶ所の縁起 三九頁
廻國巡禮掟の事 四一頁
千社詣納札掟の事 四一頁
題名納札 四一頁
額面納札 四二頁
千社札の竿 四三頁
千社札と繪本 四三頁
千社札と錦絵 四四頁
納札古書と題名集 四五頁
古人題名 四六頁
納札集會の席 五三頁

納札連號　五四頁
納札の寸法　五五頁
納札意匠と製作　五五頁
待帳附け　五六頁
納札塚　五八頁
族碑　五九頁
札所にもれたる觀世音　六〇頁
花の上野晦日の夕暮　六一頁
乃げんとなた万　七九頁
鳩谷天愚孔平　八〇頁
萩野家の系圖　八六頁
孔平と其碑撰文　八七頁
天隆公退筆塚　八七頁
釋迦嶽の石像　八八頁
桃源藏七十壽　八八頁
小野宮廟碑　八九頁
玉川の瀧碑　九〇頁
孔平の碩習　九一頁
孔平酒を愼む　九二頁
孔平十兩を取返　九二頁
女嫌ひの孔平　九三頁
神佛千社參札張等停止　九四頁

金川志ん馬氏寄贈

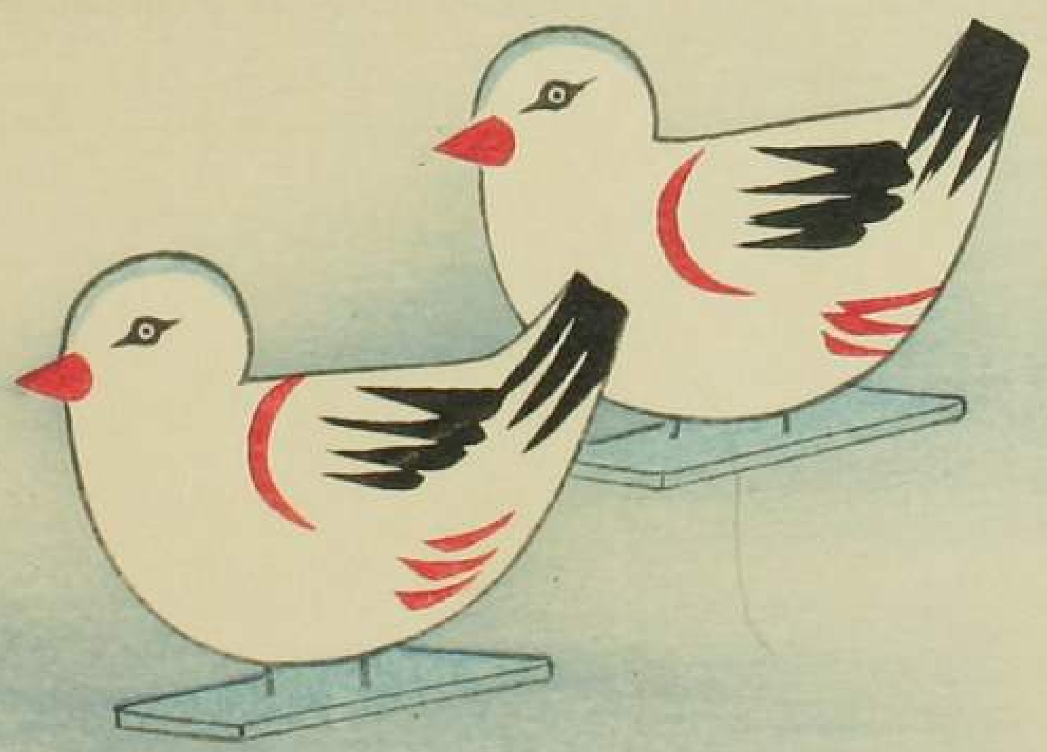
故
吉野鮨
澤川浪舟
両氏
追善
納札會

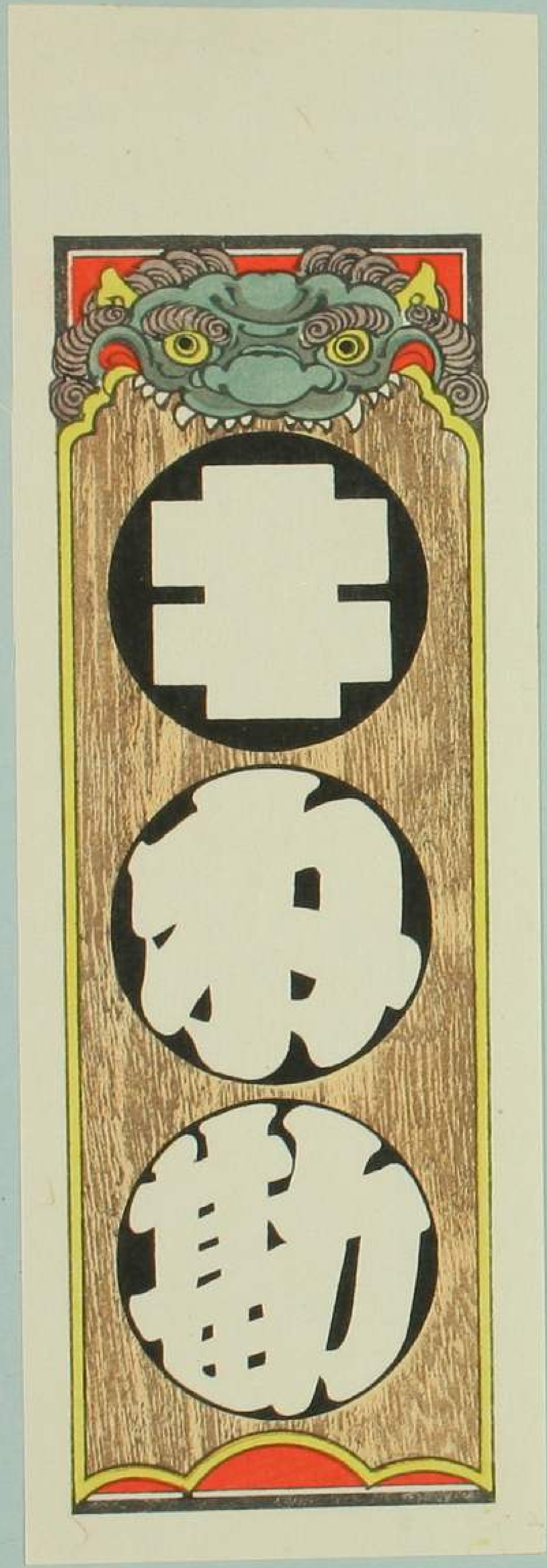
画題
隅田川
言問んありや無しや
昔乃俤げ

来ル九月廿一日夜
神田和泉橋倶楽部にて
相催候

昭和六年

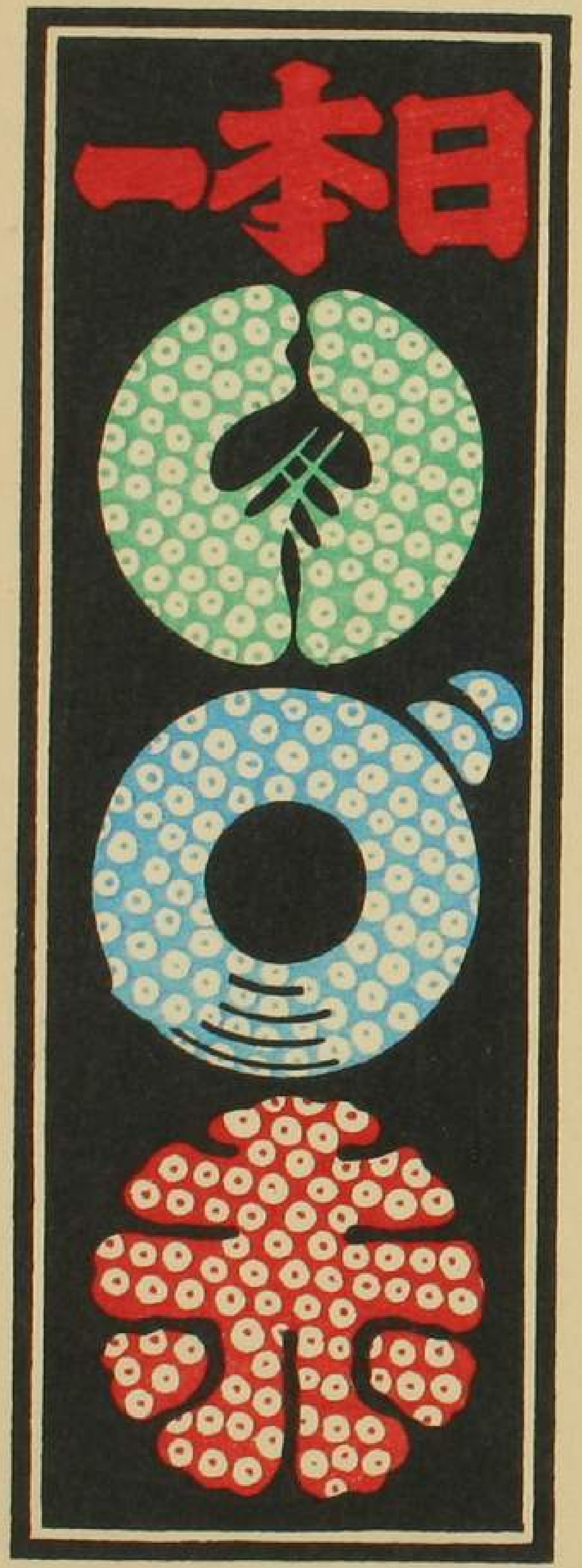
會主催
東都納札會



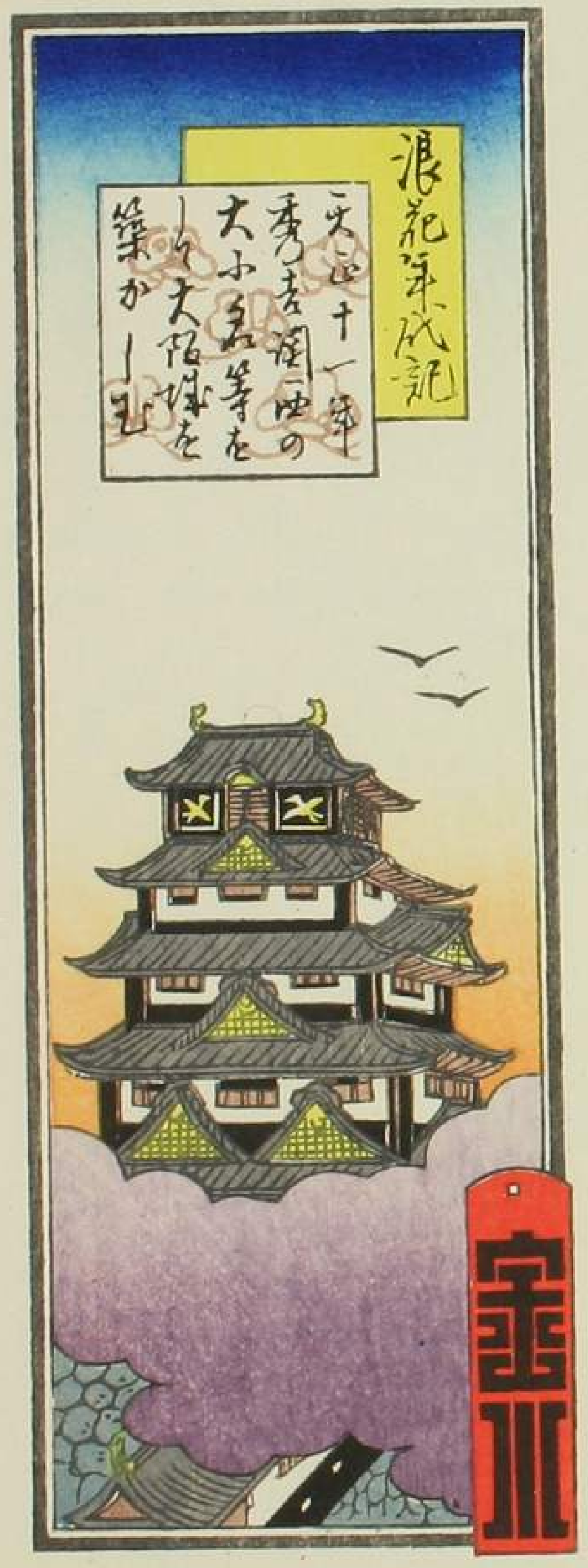


キね勘氏寄贈

御誂納札認處
おんあつらひのうさつしたゝめどころ
御茶水
高橋藤
高橋藤



いづ赤氏寄贈



大阪 金川幽松氏寄贈

大田櫛朝氏寄贈

大阪不二

贈

大阪 南なつ男氏寄贈

丸山氏寄贈

彫きん氏寄贈

奉拝
桔梗祭

桔梗祭貳哥贈

大阪　南なつ男氏寄贈

東京

T.S.K

旅の趣味會

旅の趣味會寄贈

大阪 金川幽松氏寄贈

大阪　金川幽松氏寄贈

金川志ん馬氏寄贈

金川志ん馬氏寄贈

金川志ん馬氏寄贈

金川志人高氏寄贈

金川志ん馬氏寄贈

金川志ん馬氏寄贈

金川志ん馬氏寄贈

米國
御札博士
寿多有

金川志ん馬氏寄贈

前の世の罪が
阿弥陀にを拾われて
あとをしとふて来る呉坊

納札霊場
集古庵主 金川志ん馬

又平が大津の里を
ぬけ出して念佛
とかへ巡る國々

金川志ん馬氏寄贈

29

第一番心得吉

納札ハ大可成

納札は神佛を拜して大に貼てよし
納札巡礼四季に其信仰しき利益有り
千里の道も一歩より大に歩むがよし

落書謹方宜

名所に走り神佛に敬意をかき
社堂をけがさぬ用注意すべし
堂宮へ落書はつゝしむべし

他札上禁貼

古人の札を大切に保存し他人の札へ
貼掛けをせぬ用注意すべし
禁ずる場所や納数へ札を貼るべからず

一集勝百文

蒐集は何に満ずす大にやるべし
同好者は時折り集合って雑談する事大によし

定メ郎之身代谷汲も打納め札所へ残す名ぞ義姉しき
此條々をよく〳〵心得て神佛を拜し納札をなす者は
福寿圓満うたがひなし　但し請合申さず候

志ん馬

納札霊場　集古庵

金川志ん馬氏寄贈

東北南西隨意廻、社堂扶臾自在竿

奉拜神佛題名功德成就祈

納札巡禮

謹貼八寸之名牌、名画踏樂七寸鞋

金川志ん馬

集古庵主

納札と俗信

金川志ん馬著

花山法皇

畏くも　人皇第六十五代花山天皇御年十七歳にて、圓融院の御譲りを受けさせられ給ひ、後宮には關白頼忠公の姫諟子君、爲平親王の姫婉子君、並に大納言藤原朝光の娘姫子の三方を女御に召され給ひしが、其後太政大臣藤原爲光の娘低子を弘徽殿に召され御寵愛遊ばされ給ひしを、低子君は幾何もなく世を早う去り給ひしより、帝御悲嘆に沈み給ひしかば粟田關白未だ藏人の辨と申す方、大集經中の

妻子珍寶及王位　臨命終時不隨者
唯戒及施不放逸　今世後世爲伴侶

と扉に書いて御前に奉る　帝此文を御覽じ給ひ遂に寛和二年六月廿二日の夜密に貞觀殿を忍び出でさせられ、御供は僧嚴久、藤原道兼の二人隨從して山科の里元慶寺（悪徳寺又東山寺と稱す、陽成天皇の御勅願に依り貞觀十一年創建せし所にして天台宗に屬し、薬師佛を本尊とす、僧正遍照嘗て當寺に住したるより世に同僧正を花山和尚と稱し、今も陽壇に其像を安置せり）に入らせ給ふ、依て藤原道綱は即時に璽劔を捧げて　東宮に献じ奉り、直ちに、東宮御位に即かせる、是　一條天皇と稱へ奉る、斯て　帝には御落飾遊ばされ給ひ御法號を　入覺と稱せらる時に御年十九歳其れより花山元慶寺に住ばせられ給ひしより、花山の法皇と申し奉るとぞ、後程なく法皇

大和の國初瀬の里長谷寺に行幸遊ばされ戒師を求め給ふに、其頃観音示現の名僧とて眼中常に人を射る光ありと稱せられたる河内國磯長の里　聖徳太子の御廟所石川寺（叡福寺）の佛眼上人こそ三摩了解の高僧にて　法皇の戒師たるに足るべしと聞し召され、再び玉歩を此地に御運び遊ばされ得度授戒を受けさせられ給ひ、戒師に最善の報謝を問はれ給ひし所、上人の御答に「今より二百七十年程昔、徳道上人が観世音菩薩御靈場巡禮の道を創めたりと雖今や年と共に頽廃す、是れが再興は
　法皇の外其人を得ず、巡禮の功徳何物か是に勝らん」と、　法皇遺喜の余り同年七月廿八日播磨の國書寫なる圓教寺（性空上人の開基にして　花山天皇の勅願所なり。當時　天皇三度當山に行幸あらせられて鎮護國家道場となし給ふ）に行幸あらせられ、開山性空上人より又々　観世音菩薩御靈場巡禮の功徳を賞讃されしを聞し召され、愈々巡禮再興の御立願を發せられ給ひ、佛眼上人を導師と頼み性空上人、辨光僧正を御伴として、永延二年春三月十七日都を後に御発足遊ばされ、歩み慣れ給はぬ途を遠々と、紀の國なる高野、熊野路より漸く那智山青岸渡寺に詣で給ひ石摺りの御札を納め又奉納札に書かせ給へる御歌に

　昔より風にしられぬ燈火の
　　ひかりぞはるゝ後の世のやみ

と詠じ給ひ、巡次國々の御靈場を行御巡禮御修行なされ御製の御詠歌を奉納遊ばされ給ひて後、武蔵の國笹戸山長泉院（秩父第二十九番札所）へ納札に御用ひ遊ばされ給ひし石の御印を納め給ひ（此石は現に同寺にあり）去る程に恙なく観世音菩薩御靈場を打ち納め給ひ終りて又も那智山に御來籠遊ばされ、瀑布（有名なる那智の瀧）の傍に一宇を建立せられ御巡禮御修行の時、畏くも玉體に懸けさせ給ひし立像千手観世音菩薩の黄金佛を納め給ふ（右観音堂は星霜久しうして頽壊に及び終

—紀州柏嶺花山法皇経墳—

に明治十年其堂を毀ちて御本尊を本堂に移し安置す）、又一嶺登れば　法皇三歳の間幽棲し給へる行宮の地にしてそが礎の跡あり、茲に石檀ありて　法皇常に御用ひ給ひたる御碁二個を蔵む土器の御椀と御壷なり、或る時つれづれに　法皇御手づから櫻を植ゑ給ひて、

　木の下を棲家とすれば自から
　　はな見る人になりぬべきかな

と詠ませ給ひし其櫻木も今は早枯れ朽ちて後に植えたる若木の櫻昔を偲べとや栄ふ、又後年西行法師那智の山に　花山院御庵室の跡を訪れ御製を思ひ浮べて

　木の下に住みける跡を見つるかな
　　なちの高嶺の花をたづねて

と詠じける、扨も　法皇は持戒堅固にましまして二十有余年の永き歳月時々津々浦々に至る迄諸の御靈場の御行脚巡禮を怠り給はず、正暦五年の春攝津の國有馬郡三輪村の畔より八葉の蓮華を示せる孤峯に御登りあって草の庵を結び給ひ、座禅観法に御心を澄まし、専ら菩提の道を求め給ひしはいとも恐多き御事なり、後源頼光御草庵の跡へ父滿仲の滅罪を祈り堂宇を建立す、今の真言宗東光山花山院菩提寺なり（寺内に　法皇の御廟及び　皇后塔あり又同所に琴彈坂と云へる所あり、法皇偶々月に琴を彈じて御慰み遊ばせし所なりと）、寛弘五年二月八日と云ふ日　法皇には御年

僅に四十一歳にて花山院に崩御遊ばされ給ひしは申すも哀しみの極みなれ御尊體は山城の國紙屋川の上法音寺の北に葬り奉る、現京都金閣寺の畔なる　花山院紙屋上陵と稱へ奉る是れなむ。

廻國巡禮の由來

信仰を主とし傍ら視察と遊覽との目的を以て、現當二世の利益を求むる廻國巡禮の多く行はれたのは、江戸時代が最も盛で有ったらしい、其由來に遡ってみると、よほど古いもので有る此巡禮思想は西洋にも有るが、我國へ渡來したのは無論印度及び支那からで有る。又僧侶でなく一般信徒が廻國巡禮を志し、同行何人又は何度目と印した木札を打ち、或は紙札を納め靈場を巡拜する樣になったのは、平安朝の事で有る其れから鎌倉時代にかけて、三十三ヶ所觀音靈場の巡禮が盛んに行はるる樣になったけれ共、戰國時代には兵馬の爲に荒されて路も塞がり危險も多かった故少しわ衰微したやうで有るが、猶此間に靈場巡禮のことは相変らず行はれていた。江戸幕府が開けてから往來も自由になり信仰の熱も高潮されて、笈を負ひ杖を曳いて遠く巡禮に出かけ或は一家族打揃って、廻國に出て靈場巡拜納札をして歸る事が盛んで有った。

巡禮の名稱

巡禮とは諸國を歴巡し、所在の神社佛閣に詣りて禮拜し自家の冥福を祈り父母兄弟の菩提を弔ふを云ふなり、(後には佛閣に限りて此稱を用ふ)、台類大節用集に、巡禮遊歴勝地巡禮靈區之謂出金剛頂經とあり、東鑑にも巡禮の稱見へたり、建久六年乙卯二月頼朝鎌倉より上洛南都東大寺供養の記事中、四月三日戊午將軍家並御台所姫君等密々石清水以下靈地巡禮給云々、同六月十八日辛未御臺所姫君等密々令巡禮清水寺以下靈地給云々、類衆名物考に、寺巡り即是巡禮也、素性集に、寺巡りと詞書にはかきたれども歌には佛に祈るにはあらで神ぞしらんと云へば神佛かねていふにや、又法皇寺巡りし給ふ御供にてと有り、古今集に、ふして思ひをきてかぞふる萬代は神ぞしらん我君の爲、後拾集に、法皇寺巡し給ひける道にてかへての枝を折てと有り、巡禮の稱も古しと云ふべし、昔より巡禮を順禮と書せし考多し、是は順次に禮拜するの意なるべしと雖もよろしからず、和漢三才圖會には順禮宜作巡禮非順逆之義とあり、又俗に巡禮者を單に巡禮とのみ稱し來れり、山陽地方並に四國にては巡禮を遍路といひ、婦人などはお遍路さんと呼べり、是ば遍く諸路を巡りて諸寺を順拜するの略語ならんか。

巡禮の種類

巡禮は其人々の志願に因りて一ならず、三十三所、八十八ヶ所、二十四輩、六十六部、七大寺、六阿彌陀詣り等あり、三十三所參りは西國が元にて夫れより坂東、秩父並に東京にありては觀音の各靈場を巡拜するを云ふ、八十八ヶ所參りは略して八ヶ所參りと云ふ、四國が元にて弘法大師の遺蹟を巡拜するを云ふ、二十四輩は親鸞上人の遺蹟二十四ヶ所を巡拜するを云ふ、六十六部は略して六部と云ふ元は行脚僧の六十六部の法華經を我が六十六ヶ國の靈地に納むるの謂なりしが後には國々の國分寺若くは一之宮などに納むる事とな

六十六部納札

天下和順
奉納大乗妙典六十六部日本廻国
羽州米沢置賜郡
日月清明
塩野行者忠兵工

れり、今は僧俗男女諸國の神社佛閣を巡拜する者の通稱となれり、七大寺詣りは東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺、是皆古跡にて故由ある寺なれば是れを巡拜するを七大寺詣りと云ふ。六阿彌陀は一番豊嶋の西福寺、二番沼田の恵明寺、三番西ヶ原の無量寺、四番田端の與楽寺、五番下谷の常樂院、六番亀井戸の常光寺此六ヶ寺を巡拜するを六阿彌陀詣りと云ふ、

「六阿弥陀の由来については、鎌倉時代の初め源頼朝幕府を鎌倉に開きし頃武蔵國豊嶋郡平塚に豊嶋権守清光と云へる人あり清光は四男一女有り、一女は足立郡の豪族足立少輔に嫁す、蓋し女は才色双備り時人の熱望する者多かりしを、父清光は政略結婚を以て女の心中を顧みずこれを足立氏に嫁せしめたる者の如し、己にして嫁して家庭の事情悪しく遂に身を荒川に投じて死す、侍女五人もともに殉じて入水す、清光是に於て女子等の冥福を祈らんが為に彼等女子の出生地毎にいて一ヶ寺を建立す、是六阿彌陀の起原なりし」其他六地蔵参り地蔵四十八ヶ所参り、十二薬師参り、辨才天参り、稲荷参り、二十一ヶ所参り、閻魔参り、八幡参り、百社参り、千社参り等有り。

巡禮の人物

巡禮は何人の為しても妨げざる所なれば、其初は高貴の御方より始りし者にて下は賤夫に至る迄、其人の志願に因りて之を修め兼より階級ある事なく多くは佛教の信徒たるは云ふ迄もなき所なるも後世に至りては一種の秘密界となり、俗に「世をしのぶ」と稱するもの往々其姿を此徒に変じ一時の逃亡策を講じ或は他國の現状を探し、或は其仇敵を索尋する等種々の隠密行動を為せり、而して高貴の人は戦國時代或る事情の外に之を為せし事を

聞かず、大抵は不幸にして其父母の蹤跡を知らず、若くば恩愛の骨肉を失ひ、又は破産流

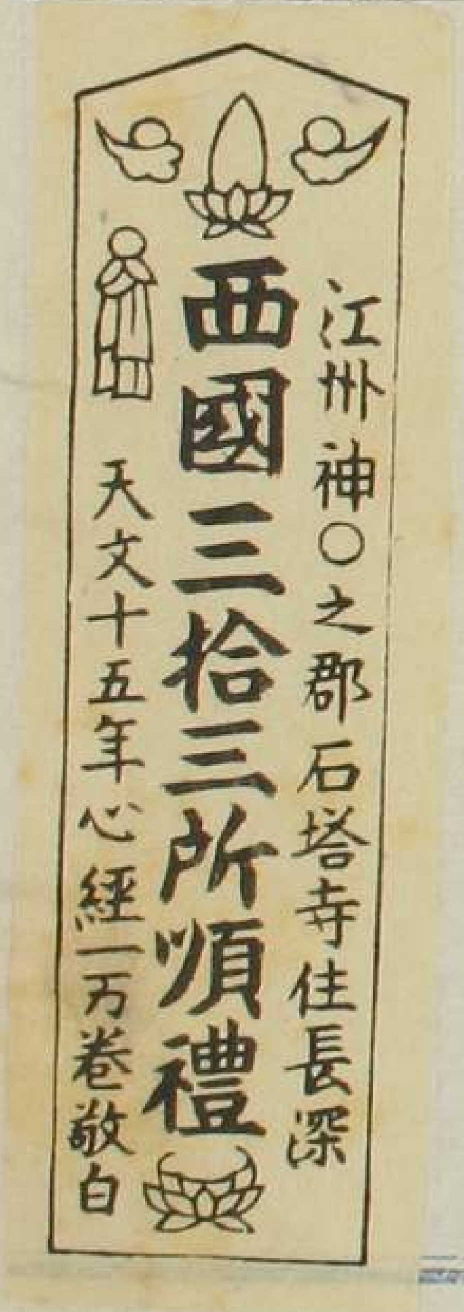
府内大師諸納札

落したる者の類にて中流以下の人物に限れり、山陽及四國の地にては貧賤ならざるも一度は修行の為めとて遍路に出るもの有り、巡禮姿となり逃亡策を講じたる一例を擧れば、「太平記五、大塔宮熊野落の條に云内に、病者有と覚へてあはれたつとからん山伏の出られかし、祈らせ参らせんと云ふ聲しけり玄尊は、はやくっきやうの事こそあれと思ひければ聲を高らかに上げて、是れは三重の瀧に七日うたれ那智に千日こもりて三十三所の巡禮の為に罷出たる山伏ども道を歩みまよひて此里に出て候、一夜の宿をかし一日の飢を休め給へといひければ云々此類往々有り。

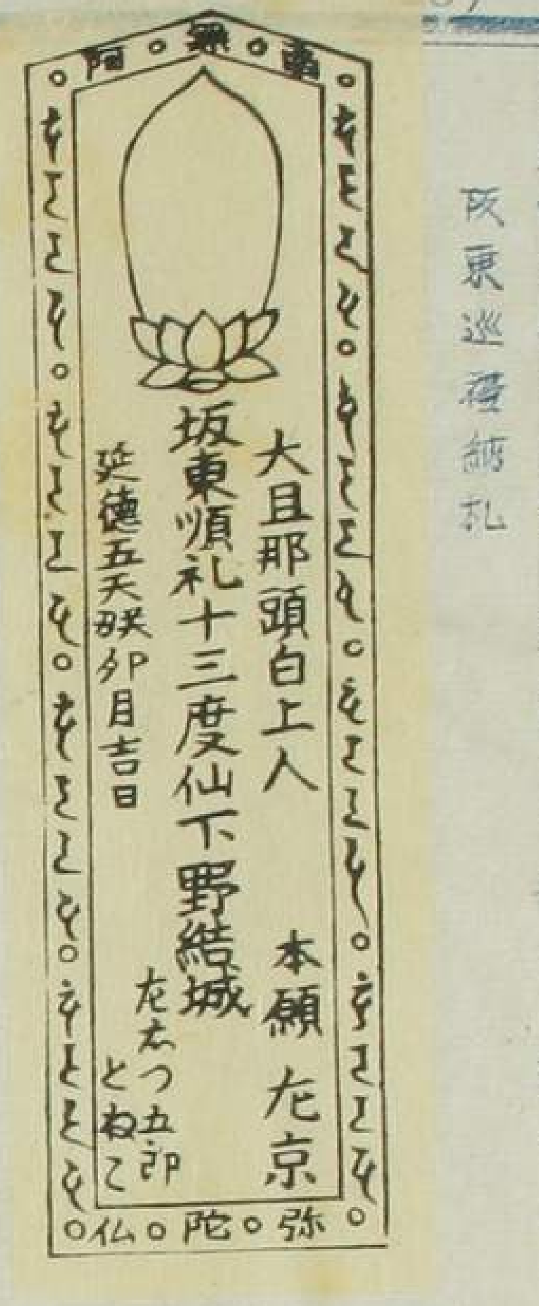
巡禮の納札

巡禮者の打つ札は木にて作れるのみならず、或は銅にて作るもあり後には大抵紙札を使用するに至れり、札を打つ事は其始めより巡禮には札を使用せしならむ故古き事なるべし、然れ共巡禮一般に札を打つ事は應永の頃より專らなりと見へたり、「源平盛衰記三十九巻經

西國巡禮納札



盛屋嶋を出て高野に参詣する條に、泣く〳〵



阪東巡禮納札

高野へ参り給ふ思ひ出事ありければ、此次に粉川寺へぞ参られける此寺は大伴の小手と云し人、我朝の補陀落是とて覺を結べる所なり去る治承の頃小松殿熊野参詣の次に彼寺へ参り給ひたりけるに書置給へる打札あり、今一度父の手跡を見給はんと思ひ出で給ひけり、彼札を御覧ずれば落涙に墨消へて文字の貌は見へねども重盛と云ふ字計は彫て墨を入れたれば有りてながらに変らねば泣々是を見給ひける云々』とあり。

此文によれば木札へ文字を彫入れられし者ひし又石山寺には永正三年同八年彌勒二年天文十五年等の巡禮木札有り、打札には前記の如く初めは木及び銅の札等を使用し一ケ寺々々に納めしが後には紙札を使用するに至れり。

巡拝

凡そ諸靈場を巡禮するに一番より二番三番と順次に参詣する時其の路迂餘曲折の處ありて、日數を費すことと多きを以て其發程の各方面に因り努めて捷路を求むるを常とす、東京の八ケ所参りの如きは参詣の回數を重ねるを崇尚とするを以て、捷路を求むるを是れ急とし各自尺寸を競ひ決して迂路を取りて曠しく日數を費すことを爲さず随て番號の順には巡拝せざるを例とし來れり。

御詠歌

巡禮者の唱ふる御詠歌と稱する歌は何人の作なるや詳かならず、塩尻に其歌ふ所の歌は花山院法皇の御製云々と有れど、法皇御製の御歌は

昔より風にしられぬ燈火の
ひかりぞはるゝ後の世のやみ

川流納札

今の御詠歌にあらず、「思出草續編三」には阪東巡禮歌と云ふ者は、いつの頃の作なりやと聞ひしに（松平冠山侯の塙檢校に問れしなり）（歌の時代はあたらしくいつの頃ともいひがたし）と有りいづれにしても後世に作りし者にて、全く花山法皇の御詠歌にあらざるを知るべし

西國巡禮の起原

抑も西國三十三所の觀音靈場巡禮のはじまりを索ねて見ると　文武天皇の頃大和國長谷寺の徳道上人は觀音信仰の篤い上に頗る機智の勝れたる方で有った、慶雲三年九月十五日伊勢太神宮に参籠し其の御本地を拜し觀世音菩薩の示現し給ふなりとて

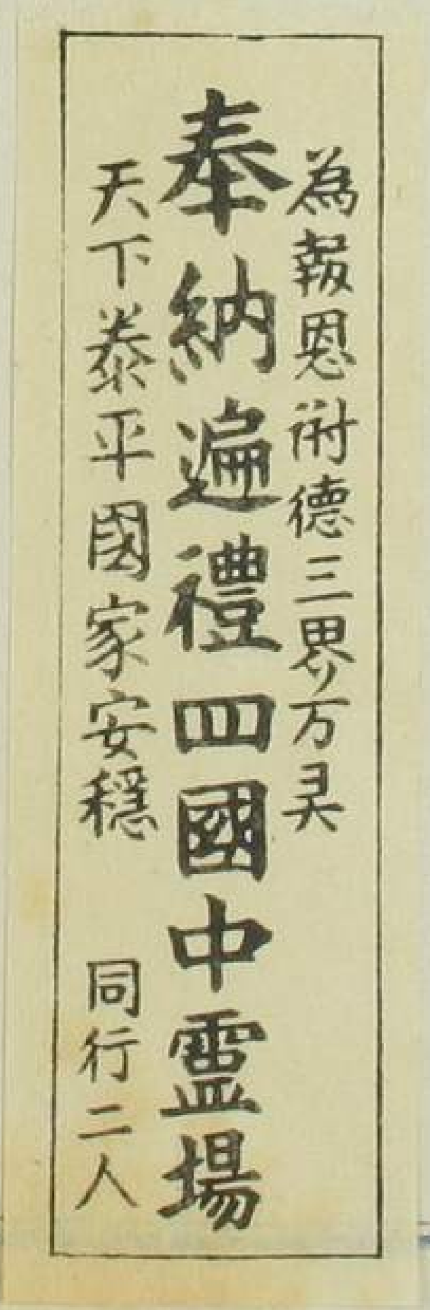
御本地わ大日如來　大日輪は觀音なり
觀音假りに日天子　日天こゝに大神宮
日本を救ふ大慈尊　これ觀音の示現也

尚徳道上人は観音の功徳を普く民衆に知らしめやうと、閻魔の説に託して霊場三十三ヶ所の巡拝の功徳を弘遍された卽ち其説に由ると、昔養老二年二月十五日上人頓死して冥土に赴き閻魔大王に謁した大王の起請されたのは日本観音霊場三十三ヶ所巡禮した者は如何に悪人でも其罪障消滅する事に因て極楽世界へ迎へられる若し萬一にも地獄に來る者が有ったならば、大王自ら代って其罪を受けやうと其證據として寶印までも賜はったと云ふ事にして自ら先達となり、善男善女は素より罪業深重の輩も餘さず三十三ヶ所観音霊場を巡禮せしめられたのを巡禮の権輿として有る其後寛平年間　宇多天皇御出家遊ばされ益眞僧正に灌頂を受けさせ給ひ、自ら観音の化身なりとの霊夢に感じ、播州中山寺へ御参籠あらせられたやうで有るが未だ霊場巡禮に行御されたた事はなかった。又永延二年春　花山法皇巡禮所興の御立願を發せられ給ひ観音霊場を御行御巡禮御修行遊ばされ給ふ、其後、後白河法皇熊野権現の神託を受け給ひ再度巡禮御修行を棊し給ふ。

四國八十八ヶ所の縁起

我朝の延暦二十三年空海入唐して長安の青龍寺の大師恵果阿闍梨に逢はれ眞言秘密の法を悉く授り、歸朝の時に臨んで夜の般若三藏に逢はれたる砌り三藏の仰せに五天竺の華は八塔に参詣して廣大の利益に與れり、されば

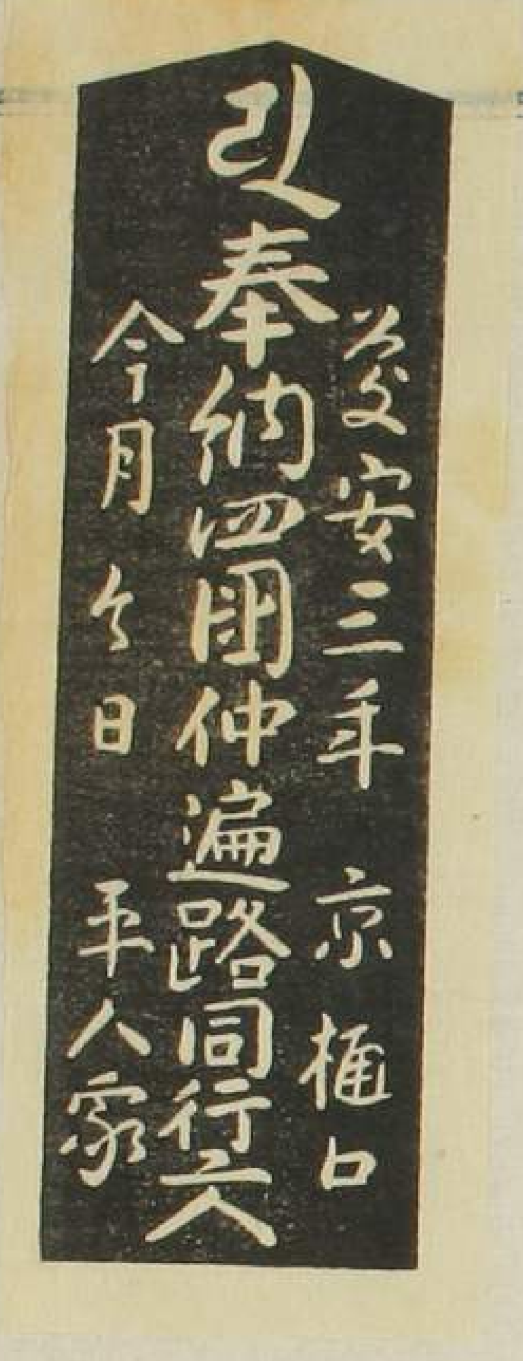
(四國遍路納札)



我唐土の衆生に結縁せしめんと思ひ我れ霊塔

の土を隨身せり、大徳の日本に歸り給ふこれに過ぎたる幸なし此の土を分けて大徳に奉る願はくば日本に歸り給ふの後、霊場を見定めて此土を納め、天竺八塔に擬して衆生を利益し給へとあり、大師歡喜に堪へず日本に歸りて後思ひ給ふは、天竺の國廣く人気もゆるやかにして、信心に入り易ければ、わづかに八塔を拝して信心に入り利益を與ふるといへども、我日本は國小さく人氣も麁きが故に信心にも入難からんか、さらば此八塔の土を和合

スタール博士大正十年三月四國遍路のみぎり五十三番札所にて発見せし銅製の納札



して天竺の八塔に十倍し八十とし又元の八塔の本數を加へて都合八十八ヶ所となし、阿波、讃岐、伊豫、土佐の四ヶ國の難所に安置し來世の罪障深き衆生に難所苦行の懺悔を爲さしめんが爲、扨てこそ四國八十八ヶ所の霊場とは爲してけり。誠に四國に此霊場を建給ふの御心は經文の中に悪業煩惱を断し盡す教説の喩を以て欲色無色界に於て四諦を観じ八十八使の見惑の煩惱をいと細かに説き給ひ又諸人をして一つの浄刹へ詣でゝは一つの罪を除き次ぎ〴〵かくの如しつゝ、終りには八十八のあら〳〵しき罪も速かに消へ失するが爲めなるは云ふ迄も無けれど是れぞ大師の恩徳を遵慕崇敬し、且は遠く四國に赴き難き人々の便を計りし者なれば是れも併せて記し置くなり。四國八十八ヶ所の巡禮の納札の書方は左の通り書くべし

奉納遍禮四國中霊場　同行何人

札はさみ板の寸法は丈け六寸、巾二寸にこし

こうべし
表書　奉遍禮四國中靈場　同行何人
裏書　南無大師遍照金剛　國郡名附
左の通り書くべし、又札はさみのかけ方は順に巡る時は字頭を左にすべし、逆に巡る時は字頭を右にすべしと心得置くべき事

遍國巡禮掟の事

一、旅は道づれ世は情と知るべき事
一、朝夕三寶崇敬を怠らざる事
一、騒々敷振舞わ一切謹む事
一、滑稽は可成調子を損ねん事
一、法は押賣せざる事
一、十方法界の供養に應ずる事
一、名勝舊蹟を見逃すべからざる事
一、路銀を湯水の如く遣はざる事
一、途は脚の長短に依りて均等を保つ事

千社詣納札掟の事

一、信心を祭祈にして名前に札を張らぬ事
一、神佛を敬し謹んで題名札を納むる事
一、神佛の尊號ある額は素より他の納額にも札を張らぬ事
一、題名を裏方へ納札はせぬ事
一、神佛に詣で堂宮へ障らず落書はせぬ事
一、稼業職分をかきて遠行はせぬ事
一、集會の席にて喧嘩口論はせぬ事
右之條を堅く相守り神社佛閣を拜し納札巡禮をなす者は諸難諸病を免れ三世の大益を受け福壽圓滿諸願成就は疑ひ無し

題名納札

題名納札とは單に落書に似て非なる者なり、『落書は彼の辻堂や北の宮』と宗因千句にも出て有る如く古き神祠佛堂に今猶存在せる墨蹟床しく其人の跡を偲はるものありき、官幣中社嚴島神社（安藝の宮島）の神祠に在る題

名なる者尊圓親王の題名石川丈山の題名後藤又兵衛の題名、其他著名士人の題名幾多もあり、又埼玉縣西吉見村（阪東十一番札所）岩戸山安樂寺本堂の天井板に寛文己五年七月二十一日綿屋由右衛門外三人と有り、鎌倉（阪東四番札所）大藏山杉本寺本堂の天井板に寶永二年六月十二日江戸釜屋某と有り他に享保七年六月廿八日山村四郎矢衛とあり、此れ題名納札なり神祠を問はず佛堂を論ぜず自己の題名を書するを即ち題名納札と云ふ者なり、巖上題名としては武州西多摩郡氷川村日原鐘乳洞入口の左下の巖に寛政五年八月廿七日鳩谷孔平子撰と彫ってある。又（大宮口より登山）富士山頂上コノシロ池の左巖に鳩谷孔平と彫ってある、好事家は一度探検すべし。

額面納札

納札式長方形の木札を排列し一面の扁額に製り神社佛閣に奉納せし者を云ふ、昔武藝の師範自流の門下の連名其守護神の祠宇に奉額せしに擬へる趣あるもの即ち額面納札にあり、天保の頃最も盛んに納札を額面に造り奉納したるものなり、現に川崎大師に天保十年に奉納せし蒔絵の題名納札の納額がある。其初めの頃は桐の木片をうるし蒔絵にて題名として作りし者とか聞く、後年種々の木材を選み題名を彫刻に托し永久保存を圖るものとなしたり。神佛の諸社相企つるもの花柳界の誰彼相圖り作るもの諸職同業者の造れるもの廣告的諸賣品を列記し奉額に仕立るもの、未だ一回の納札も爲さざる者も此額面納札に加入しあり、之れ一種の交際術名聞術信仰に成るものに因る準納札の額面に奉献なすは神社佛閣の莊嚴禁せる社堂に對する納札の一種にして大なる趣味を缺し手段といふべし、亦枝招牌といへる者あり、之れ又納札者流の行ふ處の題名なり、富士、大山、成田山及び諸諸社の諸名看

桜にして其休息茶屋へ贈りたる者を擬ふて納札的自己の題名を彫刻し、諸神社佛閣に属する休憩茶屋の軒頭室内に聯列するに至る、之れ等は題名式手洗手拭、花暖簾、納札模様に類する者なり、之れ等総じて名聞的の感念の幾分を有しあるものと疑ふなり。

千社札の竿

継ぎ竿振出し竿を用いたはいつの頃よりなるか、手貼り、なげ貼は其始なり、継ぎ竿を一般に使ふ様になったのは享和の頃である、振出し竿は文化の始めと思ふ、文化八年花亭我酔写本花の上野晦日の夕暮の内に『団子の言に二間入りは一本有る（中略）三間計も出る振出しをこせへてくんねへ』以上の事が書いてあるから此時分には盛んに振出し竿を用ちいた者と見へる今日でも三間及び三間半の竿もあれども一般の使ひよき竿は一間半より二間で有る。

千社札と絵本

絵本或は黄表紙の外題書又は袋紙に至る迄千社札を應用したる本を調べて見ると神社佛閣の社扉堂柱に貼った図が重である、絵本吾妻の花（北尾重政画明和五年版）には浅草観音堂の柱に千社参りと記せし札を三枚張附あり、黄表紙の利生節花扇観世水（喜三次作安永八年版）、両頭筆善悪日記（京傳作重政画）寛政十一年版等にも千社札が出ているが此時代には継ぎ竿やふり出し竿を用ひぬ故貼場所が皆低くかいてある、笑話水の月（芝優文頭文化五年版）には人家の板塀に深草亭、八官平、田中政の札が貼付けてある図があった、安永八年千社出版の折句規矩のしほりと題せる書に当時千社参りの流行せし事を諷する句あり「千社札書く傍で讀む江戸砂子」とあり。

千社札と錦絵

文化八年中村座に於て尾上松助へ三代目菊五郎）が演じた髪結才三郎を初代豊國が筆の錦絵其背景には極高い處に千社札が張ってある、又京橋の坂本仙女香は千社札の全盛時代に自家の廣告を利用して香蝶楼國貞にかゝし千社詣りと云ふ錦絵を発行した、其外にも花笠文京、東里山人の二人が書いた神佛立願一覧と云ふ両面摺を初二三編と三枚出して居る、萬延元年には亀戸豊國が雁金五人男の五枚絵を蔵版から出した権十郎、芝翫、家橘、市蔵、田の助、で上は五枚ぶっ通しの花のれん、此れに玄魚が筆で当時の納札題名を併列してある、文久元年豊國の筆で十六むさしの内（かんざし）美人絵のじばんに千社札をちらし玄魚筆にて当時の題名を入れてある、文久二年二代目廣重の筆にて千社見立源氏十二ヶ月の三枚絵を伊勢兼より發行した、文久三年の春賣出した見立七福神の七枚絵で一英斎芳艶の筆、芝翫、田之助、市蔵、家橘、権十郎、與六、小團次が七福神の見立に恵方詣りの心で各自扇五を擔いで居る、之れに当時の題名札が下って入る、此れは両國の福新の筆である、又双六としては「いろは譬神佛名勝双六」一立齋廣重画伊勢兼版「千社詣出世双六」梅素亭玄魚画安政五年「顔面相稲荷双六」魯文案芳幾画慶應四年版等で、合巻者の外題画に應用したのは文政の頃から豊國等が用いて居たが、包袋や見返しに烈しく利用したのは納札第二次全盛期たる安政の頃から文久にわたつて、時代鏡、倭文庫、犬の草紙、しらぬい等で、魯文作の西洋膝栗毛に外国へ千社札を張りに行く噺しあり、滑稽富士詣魯文作芳虎画萬延元年版の見返しには澤山に應用してある、これは其時代包紙や表紙扉に筆を執ったのが納札の書師梅素亭玄魚であったのと、且つ画工の芳幾芳虎作者の魯文種員應賀なども一つ

仲であった爲此式の圖案が落ちた者と思はれる。

納札古書と題名集

納札古書に就ては常に納札家の口になす處の題名功徳演説を始として納札に關する書籍を擧げれば

○題名功德演説　寛政二年刊行　刊行者 蘭華子守法　編者 悦翁田定賢

○花の上野晦日の夕暮　文化八年　花亭我醉著

○反古の種　天保四年四月　催主 形源、まる万、瓦升、辨佐

○神社佛閣納札起源 初編　安政五年五月　畫者 鈍亭魯文　口授 梅素老人

○神社佛閣納札起源 二編　安政五年秋　校訂 鈍亭魯文

○納札題名集　文久二年中冬　世話人 亀松、琴二、片長、大閤富、

○納札題名集　明治卅三年六月　世話人、内吉、ぬし助、近松、棒亀、髙米、高木米、いせ万、いづ赤、荒半、石新

○納札題名集　明治卅七年五月　幹事 いせ万、ぬし助、内吉、高橋藤、近松、しま米、荒半、石井新

○題名小集　明治卅七年霜月　催主 大西いせ万

○納札大鑑　明治四十四年六月　主筆 太田櫛朝

○時代納札　大正七年一月　編輯者 福岡玉僊

○東都納札會題名集　大正九年五月　會主 本常

○納札史　大正十年四月　藤里好古

○紀念納札題名集　大正十年十月　催主 ピヨン〱堂

納札題名集　大正十二年五月　編集 東都納札保存會

納札袖鑑　大正十二年六月　會主、西村庄、多田英、金川幽松、後見、志ん馬。

古人題名

納札古人題名古くは天明、寛政の始めより慶應の終り迄八十七とせの其間の納札家諸氏の題名を調べ此れにしるす、此外に納札大家の題名も澤山あれど第二回として改めて発表す。

小野寺庄司、麹五吉、芝伊居、高橋印勝、守法拜、藤原高達、藤原皇忠、てんこう、八官平、麹二吉、萩經拜、錢市、松賀、鳩三思、謹四呂、○青渡源、傳表新、源加一、對面萩持、神佛甚、清鹽水、伊勢政、源昌令、坂南高、鉄南孫、張遊士、玉加子、本五平、田中政、万太、八官金、大六吉、左半、鯛聲、藤僊、八官藤、左傳、我宏・麁岡斎、公虎、鉄南藤、左伊三、吉久、永貞、上庄、水金、若五、張札士、瓢芭、若莊、樂三士、美客山人、○富林平、櫻錢善、銀谷留、飯玉市、橋本餅好、井戸甚、金常五、櫻木亭、台北源、雲溪山人、狭三吉、日比鐵、富帯庄、伊勢音、柳嶋方雄、麹大甚、きんせ、西郭子、深草亭、花亭我醉、諏訪平、荒金拜、源皃光、花亀、ます谷、忠義拜、黒岩一作、山卯拜、左嶌吉、繁華子、大月直、奈良亀、筑松、浅村平、形源、土文、伊勢太、赤円子、建松、左清、昌信、江月菴、東海潜蔵、森長、香友拜、尾一、大野、住甚、濱傳、白正、剛岩、丸五、山嶋、矢平、中政、福五、茅鐵、五雲、辛卯、三橋、かしく菴、菖前松、本留、木石山人、下陽善、用太堂、太己之、

高畳銀、山岡近傳、氷耕、表具金、堀熊、
せんそう、北島市、京金久、壽喜一、磯川定、
松溪山人、上直、大貞、酔世、富系平、
花柳、東染舍、富八、路く、坂重、
笹安、松五、赤小丁、八清、藤理、
山人専、堀吉、染水町、倉重、巳彌、
十三十、縫熊、米吉、福島栄、刀藤、
有富、堤秋尿、鳳秀、思無邪町、本所七、
鮫倉、仲清、望月銀、令支汀、筆彦、
佐登守、常府神文、根岸長吉、小日竹春高、
原小富、鈴木猪、青百藤、津ゲ辰、銛紋蔵、
矢野善、右高、青江伯、深濱吉、さえし、
金木鈴庄、呆加一、鈴久一、金久、森傳、
湖十、赤山子、多松廣、大秀智、滑辰、
古志知、大二四、駒山東、豊丸正、豊丸萬、
瓦升、まる万、富士十、濱紀、小岩井、
天定、如泉、土文、大金、近亀、
柗来、岩仙、蜂亀、鉄斧、大専、
ヤリ金、正大栄、梅町、ぶ卯、松田卯、

楊三奴、松大、紋治、鉄金、金定、
酒直、石八、蘭堂、○白雲亭、
澤幸、浅左久、あべ川、兵庫屋、酒鐵、
畳金、万栄士、高峰、ヤリ一、八宮松、
山山定、紺今、三ほし、西門藤、山惣士、
辨佐、白鼠、棺本、茶安、青金、
こし松、河辰、松尾拜、ふじ岩、赤月、
丸茂、宮田拜、加賀亀、大久、娩留、
芽亀、高安拜、福直、釜千人、秋伊三、
竹長、魚音、不四六、小宮赤、濱けい、
欅一馬、五扇、馬せん、澤菊、矢鐵、
植市、荒川拜、麻小瀬、麻川與、野平、
橘三多、錦市、中島拜、あは藤、イ長、
塩藤、鹿吉、ぬつ山、小宮幸、田鶴岩、
長松、嶌彌、文花拜、雛半、夢の胡蝶、
青山じん、石鐵、畳長、上繪馬、淺只、
近新、佐吉、楚遊、テウセン、杉氏、
龍高、恵井、大せい、新勝、石川新、
下駄清、金中彦、橋松、白狐、中吉拜、

時新、鐵梅、遠幸、茂亀、濱安、
柤新、丹南正峯、中長、河文、二カ金、
玉己、藤莫、源孝、水源、大藤、
席五丁、箱善、柳燕、花傳、今富、
トヨサ、彫磯、岡島拜、佃源、仲源、
小宮山、永楽、岡五、五木、北鐵、
玉市、吉熊、鳶市、塗幸、佐野吉、
中村権、高扇間士、坂三鉄、播磨茂、米伊之、
かつぱ虎、音九鐵、久羅岩、柳湖、山音、
数清、奴新、竹之内、源七、内山常、
琴糸、赤達磨、松雲斎、河市、班山亭、
萩金、玉藤、若太、加金、清泉、
山善、浪忠、喜辰、兆子、鬼八、
松幸、川島拜、古蝶、緑桝、獅々榮、
長久、梅金、青石山、小八十、鬼遊、
鵬磯、小源、印窓、奴金、川金、
今彦、鼠與三、青浪直、つる竹、能為、
木具勘、勝亀、藤銀、鞘十、指松、
万又、参金、癸子環、山岡春孝、堀大、

元鳥、壽ばら善、伊直、恵平篤、綿蝶、
原巳、大房、金筑、吉市、八兵衛、
麻芽金、米要、尾源、池田、白和、
来惣、錺音、ヤリ安、菓子留、塚吉、
塚権、春長、酒房、鈴栄、嶋直、
増甚、ばち清、與吉、伊勢清、凤豊、
布清、染徳、銀源一、森源、淡亭子、
江戸赤、赤青狐、伊勢徳、齋藤拜、元茂、
下駄長、尾金、染長、原辰、角宇、
廣昌、田豊、平野久、紙鐵、小松、
三喜、つるよ、鶴亀、うろこ、矢尾金、
埜新、錺三、福長、龍留、赤源、
びく安、鞘文、錫吉、淺名竹、天下重、
白子市、麹木左、麹木彦、岡巳、縫金、
京市、銀善、白金、小田仙、拜榜示、
折眼、阿源、大市、○井筒金、
中かね、伊勢勝、大和彌、こさん、ば壽金、
穴清、坂辰、岡重、深辨、筋彦、
床文、奈賀芳、釘安、加奈岩、高喜三、

大黒三、釜四、鍛冶彦、伊豆幸、蓮八十、
大作、芝吉、田爲、つか政、丸忠、
飯馬、米茂、小鞆、竹村卯、菊常、
善四、小彦、井與三、伊豆源、嶋貞、
縁川亭、マサノリ、さゆげん、床丸喜、大兵、
朝吉、高徳、筆熊、保龍、三木半、
大大吉、笄谷田、彫吉、松民、福鐵、
印文、堺八十、多喜、伊豆栄、米善、
呉笠、茶久、大喜、澤田、竹要、
竹忠、寺秀、まん、箔辰、志田市、
池庄、岩直、文亀、永寛、山彦、
山市、中鐵、塗重、深源、奴辰、
左亀、三勝、太吉、和田長、長辰関吉、
よし勝、清竹、柏鶴、數富、胡蘭子、
鳴茂、びら常、富士七、遠足王、萩金、
日本光、染孫、青其碩、玉仙、玉子、
三田忠、落光人、原鐵、魚庄、龍孝、
木新、三長、草吉、前幸、壽處、
彫庄、齋小泊、大黒八、欣平、豊房、

椛崎、水佐、石光、嘉金、蛸清、
玉熊、豊作、神藤、田所萬、東都光、
はく庄、青渡金、青梅正、菓子岩、麻渡清、
乃げん、四海堂、こけはん、尾富、青渡貞、
高飾、上田音、富士条、富銀、蒔直、
蒔善、鎌庄、恵泉、芝平、今金、
つか直、山與喜、富士卯、富士亀、梅安、
松文、三平、三河金、岡文、加藤、
高永、南可、京佐、新榮、吉勝、
丁泉、相萬、青渡峯、丁榮、蒔勝、
時錦、芝鎌、岡光、奴常、酒啓、
半長、喜田福、田喜十、あんき、灰伊野、
海老徳、西伊三、だる平、吉虎、萬友、
しま亀、都賀直、生榮、彫辰、八百熊、
銹吉、荒久、平直、きん和、きん傳、
谷熊、なた万、大清、水浅、のだ平、
濱勇、歌重、形藤、千長、桐正、
ふじ長、山吉、西忠、若金、黒直、
鞘吉、小辰、西長、村新、吉音、

玉よし、黒源、寛清、亀文、樫宗、
高吉、佐市、山源、岡勘、大利、
なか庄、和歌梅、相尾の、壽し藤、亀辰、
平亀、清次郎、定丸、芝喜之、豊太夫、
ふじ留、福田喜、長廣、豆弁、久之吉、
作伊三、山本辰、扇歌準、伊勢孫、亀十、
山本八、庄九郎、佐喜太夫、大忠、田キ竹、
駒貞、芝安、山尾、山虎、田善、
酒吉、星拾、大和、川庄、小七三、
松富、小長、七源、蔵亀、伊勢平、
生勝、平関、山長、相辰、黒主、
岡喜三、だる吉、若鶴、和田亀、鶴吉
麻庄、山大、壽し勝、芝定、さの國、
江戸新、屋根林、一志田、塗十三、奴梅、
浅徳、三津彌、奈歌久、山勝、播二、
平子、時安、石松、司馬直、矢田金、
蕎麥清、圓重、海木、蔦梅、芳勝、
作金、山勘、安金、亀清、本松、
海清、鶴岩、山平、石源、順定、

丸平、辰巳宗、車太、田貞、小弁、
柄茂、岩亭、絲音、山文、村仲、
芳亀、麹家久、水巴辰、染麻古、浅金、
萬直、大知守、東飴三、八花源、鶴音、
坂米、蒔鐵、山新、蒔喜多、竹金、
太刀岩、岩初、津加茂、笹せん、桜木金、
八百金、大々清、駄爲清、森彌、市川金、
泉磯、泉壽、魚竹、登龍、鄕貞、
雷辰、竹秀、植亀、松定、大辰、
岡竹、みの彦、染文、銀庄、山竹、
蔦長、仲傳、川伊、橋金、浪吉、
駒六、大安、大豊、万喜九、植浪、
小可根、鈴喜三、せん安、中徳、仕立久、
渡福、藤市、瀧忠、仕立金、青伊、
紫徳、家根源、連丹治、尾東、浅大磯、
竹藤、丸重、石安、高平、大長、
掛常、納石、山富、武鐵、萬菊、
十九一、塗常、遊蝶、豊富、森留、
川傳、柳重、淺太市、家根吉、駿富、

岩治、柿沼、松園、柳糸、三吉、
ゑん吉、坂長、黒源、大熊、山傳、
わら清、京山善、内長、大勇、○
小川久、江銀、八円子、下駄徳、家尾熊、
海老太、綿好斎、西民、西かん、岡伊之、
大間富、富士作、尾の清、裏長、石井宗叔、
文治、文車、文蝶、さんキ、長谷松、
加奈傳、藤理三、玉猿子、末亀、鳥正、
薪辰、紺亦、田蝶、瀧，辰、法橋、
山七長、山七卯之、山七芳、鬼安、石原万、
扇慶、小ちん、木定、飴八十、濱淑、
高常、彫万、巴新、蛤長、米金、
鮨伊之、市場豊、長谷福、歌澤梅、大泉翁、
八九栄、濱田榮、船安、近江長、六巳之、
濱清、松金、廣市、かづ竹、屋根友、
十九勝、坂瀬三、清眞堂、中村鶴、八九勝、
八百平、道善三、茶屋勘、よし忠、小蝶徳、
関幸、かじ太、那歌萬、村清、増佐、
錺亀、福金、朝蝶、丸政、丸直、

金清、久小、龍余、京亀、龍浅、
谷仙、鶴女、櫻荻、竹遊、琴二、
斤長、柏喜、柏鐵、永徳、円治、
立足忠、山峯、佐久間、卯よし、芳艶、
艶廣、馬具兼、大きう、錺茂、松永辰、
八百半、喜ま善、近江留、石川鐵、ゑびら、
ばん常、境かん、関忠、船友、駒力、
扇叔、中丑、山二、鳥羽亀、宮勘、
谷仙、楽亀、千金、針松、年久、
扇金、だし徳、小はん、近徳、米中、
嶋長、花山、花麥、定直、藏久、
上幸、橋勝、浅金、芝兆、其雪、
朝伊之、鶴伊三、藤十九、大作、大亀、
大余、小松、正平、長谷虎、錦仙、
三蝶、馬具芳、皆染、佐野松、佐野園、
鳥萬、津下卯・綿虎、綿庄、綿惣、
近傳、近清、林清、慶我、時長、
茂松、作萬、梅園、近幸、小づち、
桐定、一峯、亀松、綱亀、尾源、

彫政、芳年、藤花、彌源、達長、
左福、綿芳、綿平、鈴倉、近竹、
近福、越新、不落齋、了吉、布袋左、
鹿金、東山、花銀、甲子忠、車忠、
濱井、ただ秀、山永、正木、五三、
中友、立巳之、花よし、福金、福長、
市之寿、宇治安、八尾金、米勝、中藤、
張常、寶金、福定、彫長、びら清、
叶い三、和歌清、金熊、春三、山善之、
てう金、扇伊之、薪梅、中亀、堀留、
石三、富士茂、商彦、西丸伊、左金太、
越善、貞之、濱万、亀踊、紋傳、
坂栄、松虎、芳富、左國、山七、
左卯、きせん、三勢、角万、田キサ、
塗鐵、磯安、大鋸倉、ト久ギ、岡留、
竹川勝、サ長、矢来、八九繁、伊勢平、
芳戝、扇夫、原銅、港二市、三味金、
柾木常、春力、佐ト久、小田栄、彫芳、
岩富、玉文、魯文、坂常、芝善、

黒源、勝金、五大岩、香以、山二、
坂うし、山直、山善、布友、松里、
谷権、桐山、丸定、高金、松葉、
山鶴、三金、石新、冨新、鮨伊之、
花見、油瀧、やぎん、久二松、港二文、
世鐵、染七、せん勝、かじ太、大きん、
家板熊、近江栄、上源竹、八九房、蔦重、
扇猪之、弁金、かん亀、冨仙、梅春、
海老栄、時長、弁岩、藤常、小金、
ちん熊、清徳、仲鐵、佐久、三五二、
今治、吉福、石辰、通庄、柄富、
かつゆ、年清、江ん久、彫友、中貞、
井豊、植藤、年久、笹徳、石佐、
宇佐久、石せん、家根綱、森金、古久平、
ちん勝、寿々鐵、大木正、中萬、八九鐵、
彫鐵、三川熊、角キサ、亜久里、おかめ竹、
木具幸、染治、平鶴、歌伊之、歌々平、
中米、切栄、福権、文理、松勇、
蒔金、キの清、小林仙、小忠い、伊之秀、

細亀、西金、家根音、縫亀、二四松、船常、金豊、毛呂元、壽々和、猿松、金仁、山金、壽々百、中ギ、新安、萩兼、春兼、馬具瀬、家根金、喜世勝、小三蝶、樂亀、伊三由、あが虎、現ちか、鶴椿之、平兼、山清、路久清、田花、彫幸、勝政、淺秀、茶屋熊、石文、氷八十、淺せん、寳福、翁喜、勝文、上庄、かし鍋、福新、いせ兼、歌安、九岩、古定、山小熊、柑文、春一、銅吉、きえ、墨染、西庄、可喜、印亀、東吉、駒長、新忠、玉拾、中兼、橋廣、春鐵、原政、今千、志ん直、今伊、はり蝶、喜多兼、弁房、閣政、甲亀、田正、政八、坂鶴、川吉、一庭、芳盛、山徳、本常、かじ瀧、菊半、神戸兼、大辰竹、若手、角金、北正、花正、蔵勝、和金、二八淺、菊亀、花東、小せい、渡福、江てい、大柳、光丸、おろか、駒勇、渡松、だん亀、さし辰、米亀、福幸、弁辰、淺勝、數珠市。

納札集會の席

天明寛政の頃は立茶屋抔にて寄合をなせしが其後大寄合を京橋三十間堀長嶋銀市の宅にてなす、其れより日々會合せし重なる席場を摘録せば牛嶋尾上町三河樓、銀台町壽、永代橋高尾茶屋、藥研堀初たか、駒形東雲亭、麻布一本松茶亭、今川橋山の恵、御蔵前高砂、神田松下町信樂、両國芳村、淺草瓦町若手、下谷廣小路丹波屋、仝兵庫屋、仝福山、両國森本、仝車家、仝大杉、仝萩原、仝藥研堀倶樂部、淺草地内きり家、仝駒形杉大和、仝濱村、仝あづま、東仲町伊勢竹、本所中村樓、仝井生村樓、柳橋萬八樓、深川大和屋、仝山崎亭、仝八幡茶亭、藏前植木屋、麹町山の井、

上野無極亭、本郷しく本、天神境内茶亭、神田尾野川、外神田福田家、明神桝家、人形町みさご、杉の森玉家、呉服町柳家、本町急の尾、連雀町金清樓、上槇町の池の尾、土橋加賀屋、等なり又寺院に於ける會場としては青山梅窓院、本所回向院、淺草正定寺、向島長命寺、上野両大師、染井泰宗寺等なり。

納札連號

納札連號は文政の初めに、ぎぼし連、櫻連、馬鹿連、輪袪連、一々連、矢はず連、矢車連、虫喰連、いろは連、奴連、百花草連、二引連、巴連なぞとなへて札印を同じくする事を始め、其れより天保年度には八角連、玉連、湖連、錦連、青山連、赤坂連、神納連、八丁連、泉連、札連、壽連、銘酒連、扇連、琴連、井筒連、大津絵連、なぞ盛んなり、其後安政より慶應に至る間には萬字連、中芳連、かんつなぎ連、東武連、紫連、和合連、立田連、千代田連、輪違連、八連、神田連、ぎぼし連、車連、瓢連、名所連、源氏連、山連、下谷連、板橋連、松皮連、等盛んなりしに維新の乱起り人心穏かならず故中絶す、明治十九年に至り又集合を催し月々晉札の事を行ふ明治廿一年九月に柳橋萬八樓にて大會を催す當時盛なる連號は、萬字連、入角連、神田連、ぎぼし連、輪違連、深川連等盛なり、其後梅花連、柳美連、巴連、和合連なぞ盛なりしが二十七年の頃より征清の役起り又も中絶せんとせしが石井新印藤小よし花月櫛朝いせ万泉赤其他の諸氏等大に力を盛して會勢を盛返し明治三十年六月に向島長命寺境内へ納札塚及櫻と石燈籠を建立した、燈籠には住職の筆で「納札櫻古帰華咲命書」と題し側面には発起人の連名あり、此當時盛なる連號は、神田連、深川連、惠賓連、八丁堀連、両國連、梅花連、淺草連、和合連、火消連、柳喜連、鮒連、巴連

なぞ集合を催し昔に倍し盛會となる、其後現在の各連號を記せば左の通り「東京各連」、東都納札會、納札睦會、美登里連、吉原納札會、藤花連、下谷連、若葉連、准會、雰會、中橋睦、さゞなみ連、巴連、紅葉連、壽連、寶會、末廣睦、吾妻連、三光睦、納札保存會、橘睦、栗連。「大阪各連」関西納札會、天愚會、みをづくし會、曙會、此花會、瓢會、栄連、フタバ會。「京都各連」関西睦會、三昧會、京都納札會、魁連、「横浜各連」濱麥連、関外連、金港納札連等なり。

納札の寸法

納札の大きさは天保の初め八角連のつる竹彫辰外二三の諸氏にて連札一丁札の寸法をあらかじめ定める嘉永安政の頃に到りて八丁掛十六丁掛とて大なる札を造り始め、又小札とて一丁札を四つ割の寸法の者も造る。其後明治廿年の頃二代江ぎん初代高橋藤荒半初代錦ぶん蕭朝大彌楠甚の諸氏にて一丁掛の札を標準となして寸法を確定す其寸法幅一寸六分長さ四寸八分の大きさの者を一丁掛と稱して其倍の大きさの者を二丁掛と云ふ其れより三丁掛四丁掛五丁掛六丁掛八丁掛十二丁掛十六丁掛十八丁掛けなぞいずれも一丁掛を其れ丈け増せし者なり總て二丁掛け以上に成ると一丁掛の寸法毎の輪廓の子持棱の切れ目を造り一見して何丁掛の札なる事を明にする事に成って居る昭和の今日も右の寸法に変りなし

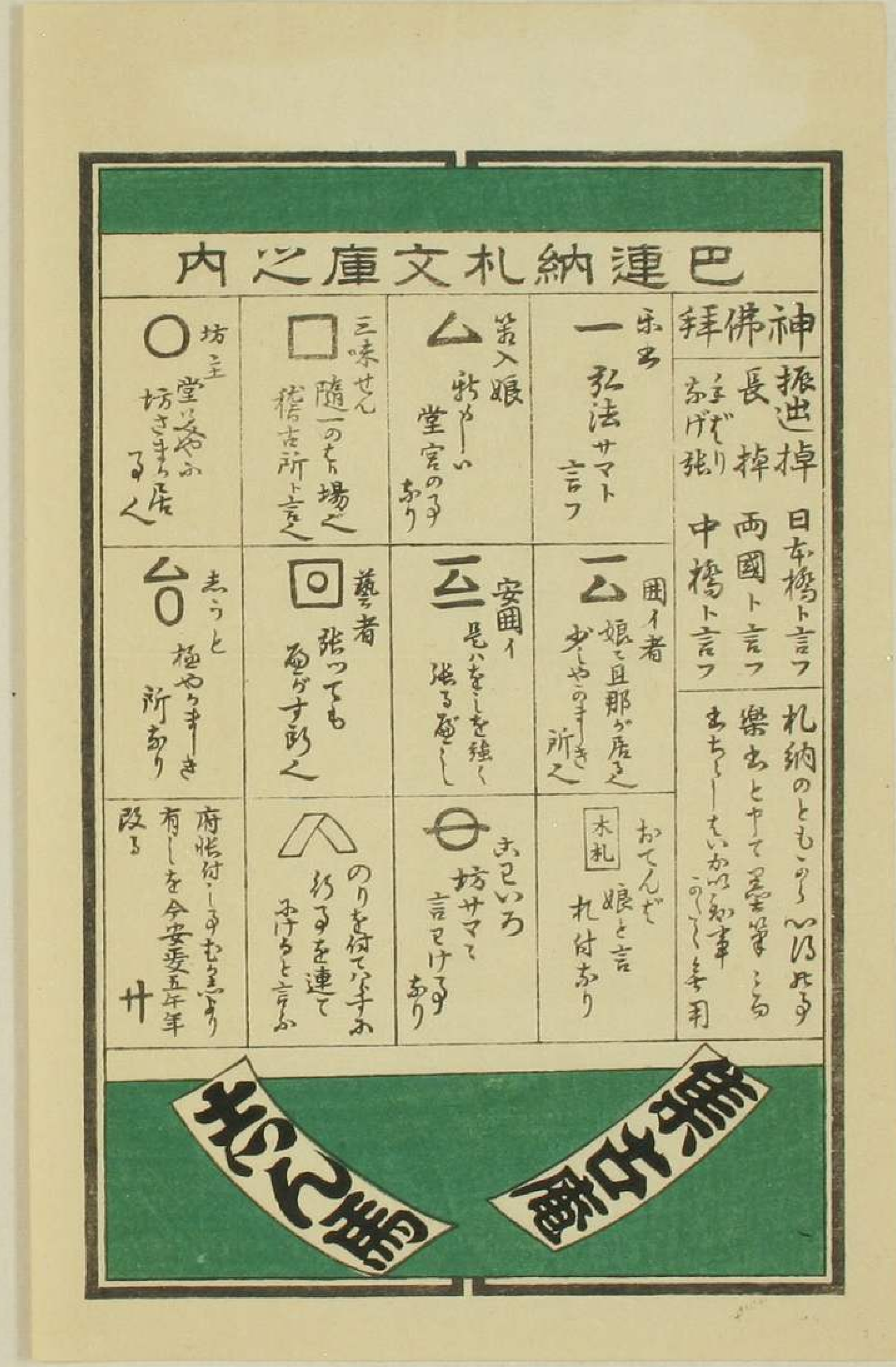
納札意匠と製作

石刷の題名納札より今は美術的の納札と成り其札に意匠図案を考へて古くより毎會花を咲せた畫伯は豊國、北斎、英泉、國貞、里光、國芳、玉漢とあり、總じて浮世絵を主とす、國周、國輝、國峯、國政あり、芳綱、芳泉、

芳艶、芳藤、芳雪、芳幾、芳盛、芳年あり、二世廣重、百鶴あり、是真あり、狂斎、暁亭あり、歌重あり、又光峨、綾岡あり、重春、幾丸、幾英、あるひは艶長、艶豊、周重、周延、清満、清貞、清忠、光玉、致湖、耕漁、至楽、柳蛙、豊斎、國松、蠏堂、耕年等著名なり、又題名に筆を取りたる諸氏を挙げればつる竹、田キサ、田蝶、交来、西かん、市場亭、片長、形源、初代高橋藤、紋田津、泉忠、梅保、梅素薫、舛まん、さわ田、しま米、蒔梅、柳阿彌、梅盛、ろいう、蕭朝、二代高橋藤、巴屋、かく丸の諸子、彫工としては彫辰、増佐、彫巳之、彫磯、彫芳、彫龍、彫峯、彫小三、彫藤、佐助巳、澤米、佐助廣、彫幸、竹慶、彫徳、彫源、彫金、高石、香取、尚摺工としては江銀、錦好斎、不落斎、江てつ、二代江銀、小よし、はん亀、扇太、前澤吉、徳永、濱宗、摺彦、古橋等なり。

符帳附け

何事も盛なる時は夫れに伴ふ種々の面白き事も起る者にて千社詣りの盛んなる時代には此連中仲間に一種の符帳の暗號が行なはれていた其れを安政五年に廿長なる人が



納札塚

塚と云ひ古墳と云ひ数多くあれど、畢竟昔から由緒の判らぬ者と相場の極った者だが納札塚は明治三十年に納札會員数名にて向嶋長命寺境内へ建立せしを始めとし其れより各所に立てられた其所在地を挙ぐれば

○向嶋　長命寺　明治卅年六月建立
　發起人　石井新、小よし、花月、印藤、蔦朝、鈴木喜

○田端　與楽寺　明治卅二年九月建立
　發起人　ぬし助、丸勘、石井新、近松、

○秩父笹戸長泉院　明治四十二年十二月建立
　石榮、高橋藤、近松、いせ万、彫金、彫源、田夕梅、二見、松兼、森慶、田か鶴、石井新

○鎌倉　長谷寺　明治四十四年十一月建立
　いせ万、田夕梅、二見、近松、石井新、

○攝津　中山寺　大正二年五月建立
　田か鶴、森慶、石榮、松兼、高橋藤、高橋藤、田夕梅、二見、いせ万、田か鶴、石井新、近松、森慶、松兼、石榮、

○高尾山二本松　大正四年六月建立
　石榮、喜生、左安、大利、高橋藤、いせ万、松兼、近松、いつ赤、田夕梅、森慶、彫源、銀花堂、田つ鶴、甚吾、二見、彫金、石井新、

○浅草榮久町　不動院　大正四年二月建立
　いせ万、いづ赤、石榮、近松、田夕梅、二見、高橋藤、松兼、石井新、田か鶴

◎九月一日震災の為此納札塚は二ツに折れる

○房州　那古寺　大正四年十月建立
　近松、田か鶴、いせ万、石井新、二見、高橋藤、松兼、石榮、田夕梅

○音羽　護國寺　大正七年十月建立
　近松、二見、松兼、一路居士、吉田安左安、石榮、本和、四郎五郎、彫源

○染井　泰宗寺　大正十年四月建立
天恩孔平の碑　發起人　いせ万、高橋藤、田か鯛、ろいう、田夕梅、いづ赤、
○西新井總持寺　大正十一年十一月建立
發起人　二見、一路居士、氏家、松泉、志ん馬、左安、彫源、石榮、夜具長、四郎五郎、
大正十二年九月一日震災に焼石又は山崩れの爲に題名及び塚の不明となりし者
○浅草區柳町　第六天境内
○浅草區駒形　駒形堂境内
○府下砂町　疝氣稲荷社内
○相州大山　良辨瀧
○淺草區高原町　熊谷堂
○京橋區西崎町　富士淺間社内

板碑

板碑とは單に石卒塔婆なり、其形には敍形の者あり、屋根形の者もあり其石質は略々一定し秩父石である。又奥州地方のは名も形も異っている碑の上部わ三角形をなし、二三本の線の彫刻あり、其下に種子を記し、飾りとして之に年號名號供養の文句等があり、其下方に佛像佛具瓶子香炉、蓮花、天蓋、蠟燭立などの繪が加って居る者もある。彫方は必ず藥研彫で、板碑の眞偽を定める上に注意すべき事である、其目的としては供養の者に逆修のものも頗修のものもあるが更に又庚申供養、念佛供養、百八燈供養、光明講結縁、月待供養、戰死者追福の者などがある、更に面白いのは宗教上板碑は必ず他力門の宗旨のものが建てるので禪宗の板碑は無い種子についていへば彌陀のが大部分を占め、其他は彌陀三尊、釋迦、大日三尊、地藏、光明眞言、大字名號、七字題目、彌陀畫像、彌陀三尊畫像、十一面觀世音等の者がある、今迄に発見されたる内の最も古い板碑としては、人皇八十六代後堀

河天皇の時代貞永年間、最も新しいのが天正年間の者である、次に珍しき板碑を二三之れに揚ぐれば
○國寶の板碑としては北多摩郡東村山村野口の徳藏寺境内にある板碑は新田義貞の鎌倉攻に際して戰死した新田方の飽間、齊藤二勇士の供養塔である（太平記にも載ってゐない新田軍の行動の日時を知る事が出來る珍らしき板碑である）大正三年八月廿五日に國寶に編入された。銘に元弘三年五月十五日とある。
○素晴らしき大きな板碑としては埼玉縣秩父郡樋口村にある、野上の板碑は同國特有の秩父石で造った薄い板形の供養塔である高さは十五尺もあり銘に應安二年十月とある。
○一所に澤山の板碑のある處は北豊嶋郡膝折村字臺（元名主）金子氏の裏の薮の中に板碑が澤山ある完全なるもの稍々損じて居る者年號梵字は存じて居れど多少破損してゐる者甚だしく缺けた者無銘の者も加へれば百數十ある。
○珍らしき板碑としては府中字屋敷分の八雲神社の路傍に有る樫の木の根で両方から抱かれた大きな板碑がある。銘に元應元年とある（傍に立札あり其れに此板碑は後醍醐天皇元應元年今より凡そ六百年前の頃の者です分梅青年会と書いてあった大正十三年三月調べし時）

札所にもれたる觀世音

我國百番觀世音靈場とは西國三十三ヶ所、坂東三十三ヶ所、秩父三十四ヶ所なり、西國札所の起原は養老二年坂東札所の起原は永觀二年秩父札所の起原は文暦元年なり、此百番觀世音の札所にもれたる名高き觀世音は城州揚谷、遠江八田寺、尾州甚目寺、河内野崎、會津示現寺、泉州水間、攝津摩耶山、尾州笠

寺、衣川久義寺、勢州津、讃岐爾谷、伊勢白子、尾州荒子、遠江秋葉寺、愛宕月輪、越中石動山、埼玉岩室山、山崎大悲山、尾州龍泉寺、茨城泉、芝區魚藍、滋賀立木、土佐蹉跎山、京都卅三間堂、南都法花寺、播州圓通寺駒込光源寺、駿河智満寺、出羽北白川、土佐小嶋寺、阿州観心寺、豊後大野、泉州方遠、淡路千光寺、深川卅三間堂、大坂清水寺、鎌倉松本寺、播州酒見寺、紀州観音寺、武州山口観音。

花の上野晦日の夕暮

晦日の夕暮とは月の晦日の夕七ツ時わ上野両大師の遷座にして三十六坊の宿坊へ月交代に移り一坊の鎮座を三十日宛とし此遷座の供奉を怠りなく月々勤る者は立身出世幸福を蒙る者と信せられて士も商工も晦日には宿坊御移りの御供申事にて大師御遷座迄二本杉の遷の茶屋に集る者多く時刻至るを待ち居る間互に懇親にもなり納札の交換もなして両大師の御供を申せしなり、古き川柳に「御遷座に入をつめ込む袋谷」「晦日も月夜御遷座の廣小路」「両大師晦日ばかりの坊主持」とあり其さまを花亭我酔が編せしなり（文化八年校本が無く寫本にて傳はる）左の如し

晦日の薄暮

自　序

古語曰天地者萬物之逆旅光陰者百代之過客と實に宜なる哉光陰は冀北の馬よりも疾して今年も早四極の月の半となり初めて其早きを知る予此暮徒然のなくさみに根なし葉子なしの趣何を立て一冊子を書綴り無いなる時に清寫せんと其儘に打過しせめて年の内に書修えて春の日の笑ひ草とせんも可世と足らさるを補んとすれと山の内か世話しければ其儘に愚な筆に書しるすと

花亭我酔まじめでいふ

維時文化昇平辛未
仲春稿成同季冬日
清寫於簡默堂牖下

花の上野晦日の薄暮　花亭我酔戯編

東都に名高き花の名跡東叡山の両大師は角をはやして悪魔をよけ遊参がてらの御法談お御堂さまへ参詣のおかみさん若後家はなを以て角を隠して拝むとも嫁や息子に無理を云ふ大師をこんどは又無理をいふお袋さんも人なれば心一って鬼ともなり佛ともなる凡夫なり、こゝに天下泰平の御祈願所東台の両大師は山内の宿坊を月毎に遷座し玉ふ故に月の晦日は供奉せんと老若男女貴賤群集する事言はん方なし三とせ此遷座に参拝すれば如何なる願も成就すると往古より云ひ傳ふ、実にも大師の利益偏き故か武き者の夫より堅き裏店の匹夫婦かゝ迄をし合ってさん詣す夫れが中に黄金の多き藏居あれば実体らしくとんだ番頭あり又持佛へ何と小言まじりの念佛申すおばアさんあれば深切の薄き女房より芝居の見たきおちゃぴい聟を恩らむ娘迄中々筆や言葉に盡されず其群集あたかも日本橋の朝市浅草の暮の市よりも猶にぎやかし其中に江府は勿論近在遠國津々浦々迄足にまかせて神社佛閣を参拝して印の札を納めて歩く輩あり遷座毎に参に集りて札を替ゆる事なり如何なる由縁かしらず、予明友に誘はれて此参詣して見しに数百人こぞっておのれ／＼が札を替ろをしばしゆすらいながめたるまゝ愚の筆とりて

已上作者の口上

是より本文のはじまり

「源加二」コウ渡源さんこないだはお出なすったそうだに相ふしるすで
「吾渡源」アイ一寸お門を通りましたからお寄り申しましたがどなたもお達者で
「源加二」アイ皆ずいぶん達者でございます

「青源」アノ日はどちらへ
「源加」牛の御前の開帳へ参ってね圓子にあって方々あるいたのさ
「青渡源」そりや夫でもよかったね
「赤圓子」イヤ源加さん渡源さんお早やう
「源加」此間はおくたびれなん時帰んなすった
「赤圓子」てうど四つかつちりさ
「青渡源」そりや夫でも早かったネわたしが帰ったのが五つ過ぎさアノ日はあんなに歩く積りではなかったが
「赤円子」わたしもさひとりておもしろくなかったから開帳きりにしようと思ったがい丶あんばいにお前にあったからそんじがけなく方々歩いた
「源加」とかく夫だの遠道は連がないとさむしくっていけんてね
「赤円子」サウサ連がないと草臥てネ
「南國亭寶」円子さんねつからわつちが方へ見へなんねへ
「円子」此間うちわ番がせはしくて一何ひまがなかったが此節は番を引いてからひま過てこまる
「富八」そりア本にちつと出かけやせうかねヲイ／＼大多さん／＼戸隠の開帳はどうだ人が出るかね
「大多」出るどころかごうきな人だモシ円子さん早く参ったね
「円子」初日にいったがまだだれもはらんやうすだった
「大多」霊宝場だからすぐしれるね
「櫻秀知」大多さんおめへ今年大山から富士へいきなんねへか
「大多」いきてへが此節仕事をうけ合たから仕舞ねへけりやいけねへ
「秀知」何さ今のこつちやアねへまだ間が有
「大多」どうして／＼今やうやくたてめへに取かゝつたとこ大多まだあとに二棟有
「秀知」それじやアまだ手間がとれよふがしかし

だれぞに頼んでいつちやアどふだ
「大多」どうも屋敷だから事がむつかしい
「高安」コウ秀ともし／＼富士へいくなら一所にいかふ
「秀知」アイお出なさんやしお供をしやさふ
「高安」本にじよだんは置て
「秀知」十二サそんなあんじなしさ
「高安」いくならおらが方にまだいく者がある
「秀知」だれだへ
「高安」昇曉に中村がいく
「秀知」さうするとちよ度い丶くらいだね
「高安」サウサ大勢だと道でもめる者よ
「雪月亭」コウ秀知い丶相談だの高安さんが行から諸事受持だろう
「秀知」十二サそりやアおたがいにい丶おごりもせずおごらせもせずむやみに歩いてくるのさ
「日比鉄」さう／＼ずつといつてすつと帰りやア何の事アねへのさ
「秀知」うさアねへ
「日比鉄」序に江の嶋へもめへんねへ
「高安」そりやアもちろん出たくらいたら十町や二十町のより道はするつもりさ
「秀知」もう五年斗りに成るからおらが札はあすこにやアあるめへ
「日比鉄」どうして／＼五六年もたつと一枚なしになる本にいったら辯天様の額を見て来なせへどうてきにい丶よ
「秀知」世話人がそう云ふ位じやアよつぽど目立た
「日比鉄」目立どころかア丶ナ猿の袖なしが緋鹿の子だから妙さ
「秀知」おれの札なんざアどうだ分るかの
「日比鉄」能く見りやア分るがあの内じやア源加さんのが一番よく分る
「秀知」知れた事よ夫だから
「源加」秀知ア丶石摺の大きいやつを入れ丶ばよかったにナゼ富八ともやいの札を入れた夫だからどつとせん

「秀知」大きにあいつアちいさへから分るめへ
「青渡清」日比鉄〳〵おれのはどうだ分るか
「日比鉄」お前さんのはなんでも類がねへかよく
分りやす
「富帯莊」アノモシ円子さんこねへだの丁ちん
はもう出来ましたか
「円子」まだ人がきまらないから
「富帯莊」そんならね田中政をどうぞ入れてやつ
ておくんなさい札をあげやそう
「円子」十二ヶ入れるつもりにしておいた札はお
れの方にあるからい。
「八官藤」わたしのも入れてありませうね
「円子」ム、たしか来ていたつけ
「八官藤」もしなくばお預ん申升
「瓢笆」モシ円子さんわたしのもおたのん申し
ます
「円子」アイ此札かよし〳〵
「いもすら」イヤじく庵さんしばらく本にお前は西
方をよくおまわんなさるね

「じく庵」近来どうしたかねつから出る気がない
「日比鉄」それだがなんでもこんよく歩きなすつ
たから古い札が見へ升
「東海道藏」古い札のあるといふはね守法拜さ
んにそして禄経拜さんとてんかうの札はど
こにあつても直にわかるね
「茅鐵」秀公今年は大和めぐりにいくつもりだが
いかねへか
「秀知」今そこで約束したがの大山から富士の
方の廻りで来こつきりさ
「茅鉄」夫じやアばなせねへ富八さん大和めぐり
はどうだへいきねへな
「富八」ようござんせういきやせう
「冀巳の」南國亭がいくならわつちもいきてへね
「富八」いきなせへな
「冀巳の」内でやかましいからこまつたい〳〵運だ
がなア
「富八」おれがそういつてやろう
「茅鉄」富八さんがさう云ふと出来るのさ

「南國亭」撫牛をさそい出していかふか
「茅鉄」どれ神明前か
「南國亭」いんにや深草亭よ
「茅鉄」ム、それ〳〵ちつとも多いがい冀巳の公
はうそじや有めへの
「冀巳の」いくどこかどこまでもいく
「日比鉄」コウ茅鐵アノ三昧せんや次いくと道中
で長逗留をしたがるぜ
「冀巳の」そう云ひなさんなばちが當るよ
「南國亭」夫だが旅は道連れだぜ氣のよく合た者
と四五人づれでいくと妙におもしれへねへ
「形源」富八さんは千住の方へ能くいきなすつ
たね
「富八」アイ有るかね
「形源」横札がたんとある
「富八」其はづ長いやつは裏切りてしかたなし
に横ばつかりはつたからさどこ迄いきなすつ
た、
「形源」大橋迄用が有たから序にはつてきたのさ

「秀知」形源さんひとりでか
「形源」いんにや下座音といつた
「富八」ふたり切か
「形源」そうさ
「下座音」コウ富八さん聞なせへ源公がくたびれて
のけいりにやアねつからはらねへわな
「佐野與」形源さん一向沙汰なしだの
「形源」なんの皆にいつたらおめへるすでかみさ
んが云ふにやアあすわわたしが寺めへりにい
き升からどけへもいき升めへといゝなすつた
ねへ
「佐野與」ム、あの日かそれしやアどふせいかれ
ねへ
「印徳」コウこねへだにでいしかわらへいきなん
ねへか
「八官藤」いつ所にいかふがいつで
「印徳」いつでも天気のいゝ日がいゝ
「八官藤」そんならめへりに沙汰をしたら
「留金」滑蔵さんこねへだわさつぱりお目にか
ゝらんどうかしなすつたか

「東海藤蔵」い丶へどうもてねがいそがしくって出
られやせん
「よし武」太田金村勢の札があるならくれねへか
「太田金」おめへさん有そうなものだに
「よし武」あったっけ人にとられた序に館伊の札
も一枚くんなせい
「森長孝」よし武さん能くお歩きなさるね
「よし武」イヤおめへさんは御せいが出ます
「源加一」コウ長孝さんこないだの札はまだこね
いか
「森長孝」アイ持って参ったから上げませう是は
御世話でござひました
「深川花柳」源加さんわたしのもまだいかなんだ
おとんなすつてをくんなせい
「木栖新」源加さんこねへだの銭はおめへさんに
上るのか八宮藤へやってい丶かね
「源加仁」藤公にやんなせい
「木辰新」すんなら藤さんへやりてい丶ね八宮藤
さんこねへだわ大きにお世話でござへやした

足でい丶かね
「八宮藤」(見もせで)よし〱是にやをよばねへが
(ふところへ入れる)
「三味亭捨來」若五さんおめへの方の開帳ははん
じようだね
「若五」よく人が出やす
「捨來」時節がい丶からね
「若五」ちつとをひでなさんやし
「魚かん」若五さんは本に能方歩きなつてこね
へだも府中迄いったらおめへの札が一ばんた
んとあるようだ
「若五」去年の秋あたり迄はひまさへあれば出
たが今年はまだ遠方へは一度も出やせん
「魚かん」夫だがどこにもねへとこは有めへ
「若五」何さそうでもねへのさ
「いもすら」コウ若五今年富士へいくならおふせ
ぎを頼むよ
「若五」めへりましたらいたゞいて來て上けませ
うお前さん今年お出なさればい丶に

「いもすら」どうもいきてへが責たからだゞから
しかたがねへ
「松彦」イ丶エまだおもれへ申ません
「春日堂」いもすらさんわたしにも一めいおくん
なせまし
「いもすら」イヤ春日堂まだ摺物は出來ないが
「春日堂」またどうして出來ません山長さん
「山長」なんだ
「春日堂」おめへ丸イ札が有なら一枚くんなせい
「山長」けふは札は一枚もねへ
「春日堂」アノうそばつかり
「山長」うそもんか是れ見なせい(ふところを見せ
る)
「春日堂」なぜ持って來なさらねへ
「山長」めんどうだから
「春日堂」それだって
「瓦嘉」長さんこないだは
「山長」いつも能く出なさるの
「瓦嘉」毎月たいてい出ぬ

「秀知」コウ瓦嘉さん不二けしに書た札が有かへ
「瓦嘉」(アイトふところを見て)今日はごぜへやせ
ん
「秀知」この次に持って來てくんなせへ
「瓦嘉」おめへにとうからきやい札を云ふ〱が
くれねへの
「秀知」銭喜の方にあるから待ちなせいおし付摺
つてこよう
「大々幸」瓢芭の摺りものを一めへくんなせへ
「瓢芭」ハイ上けませふ
「大々幸」おめへの方に錫鐵といふのがあったけ
がとうした
「瓢芭」今はやめて出やせん
「大々幸」板木はどうしてあるかの
「瓢芭」わたし方にありますこんど上けやせうふ
「左幸」コウ瓢芭さんこっちにも一めへくんなせへ
「瓢芭」錫清の札か
「左幸」いんにや其摺ものてよ
「瓢芭」おめへてうちんの札を一めへくんなせい

「左幸」久しくすらねへれい月もって来やさう
「宗嘉」瓢芭さんおめへの摺物遠のまた人にとられたどうたならねへ
「瓢芭」また上げよう
「宮埜」宗山人さんこないだ大師河原へお出なすったの
「宗山人」アイ四五日あとにいってね變ってきた
「宮埜」よっぽどあるかね
「宗山人」あのくらいあるとこはこまかくわはれないね
「宮埜」さゆうさ一夜宿らないと細く付歩けやせん
「三木亭」宗山人いゝへ何さ近所ネりさどうもひまがないからね
「宗山人」どっちへいってても有るよ
「深草亭」円子さんは能く出かけなさるの
「円子」焼て番を引いて居るから此節はひまさ
「深草亭」こないだも茄谷で見かけたっけがわっちちの方の連れが大勢だからだまって居た
「円子」ムヽアノ夕方に雨に降りた日か
「深草亭」さうふさうふ
「円子」渋谷の方池上の方へまはった品川へ出ようと思って大井から雨にあって品川近づぶぬれになって冨八のとこで傘をかりてよう〳〵家迄帰りた
「摺藤」モシ圓子さん成田屋と歌まろの札はたれが持て居り升ね
「円子」だれだったか
「高安」なんでも子供だっけ
「青渡原」コウ紋治〳〵穴庄は焼けやせんか霊岸嶋の穴蔵屋はたいてい焼たぜ
「紋治」わたしらが方じゃアたれも焼ません
「青渡原」森長だの半治だのこびきの紋蔵だのと云ふは一向見かけねへの
「紋治」皆ずるけます.
「幸市」音さん早かったの
「下座音」おめへ能く来なすったのかのりくつはしまったのか

「幸叩」もふすんだ〳〵
「下座音」そりやよかった
「幸叩」源加さんおめへさんこんどね小田原町の尾一が曼天百緑でも對面取持の札を一枚くんなせい
「源加」皆な人にとられてもう一めへもねへ
「幸叩」何さうふ云はずに一枚おくんなせへそんなら東西南北か武門暇日があるだろふなんでもいゝ一枚おくんなせへ
「源加」そんならてんかうでもよかアやろう
「幸叩」てんかうはあります
「富ヽ」源加さんもこまるねへ
「源加」そりやアこまった見て置てやろふ
「山宗隠士」モシ源加さん十日にはなぜお出なさらん
「源加」用が有ってをそくなったからいかなんだ
「花大俊」どうだ牛の御前の開帳は人が出るかの
「源加」けしからん人でござい升是からいらしやいましお船だと直でござい升
「花大俊」イヤ今日は先おいて歸りませふまたこないだに出かけよふ
「源加」左様なら是れから深川の開帳へおまわんなされればようござい升
「花大俊」もふ参って来たから是れからぶら〳〵歸りまさふちと来さっしゃいイヤ円子が来て居るかの能く云って下さいよ
「源加」ハイかしこまりました左様ならお静かに
「斎良亀」ヱ源加さん大ふうだの
「源加」さうさ
「昇院」花房の隠居が能く西方を歩くね
「源加」さうさ西方とろく阿弥陀を能く巡らしやした
「富ヽ」百人一首さん此間はおさうさうでございやした
「百人首」大きに蹄やした
「富ヽ」手拭を忘れやアしなさんねへか
「百人一首」イヽヱわたしぢやねへ
「雪月亭」コウ百人一首さんおめへおれの札の土へ涙かけをしたの
「百人一首」どこでへいっごろ覧へねへ

「雪目亭」牛天神の末社よ

「百人首」夫はほんとそうしました御尤なせいきし

「日比鉄」アノ元麻布の山魄だの白元だのと云ふが能くはりかけをしたっけ

「雪目亭」人の札の上へ張ると云ふはふてへねへ

「日比鉄」夫よりやア聞なせへおらが方で上げた茅場町の薬師さまの札額へ崔之が来て張った・が上手にはったから丁度書た様だよ

「源加」ぜんてへ額や御幣へ張るのは悪いが皆んな見ればかまわす張るが能くねへ

「雪目亭」張かけをするやつは目くらだろふ

「青渡源」わたしらを張るとこがないとつい目くらにもなるさ

「屋そば」渡源さんかなのはいってこれへなすった

「青渡源」おとゝしあたりこせへた

「屋そば」あんまりはんなんねへネ

「青渡源」能くないからね

「鉄南孫」渡源さんの石稽も近日頃こせへなすったね

「青渡源」さうさありやアまたかなりだ

「鉄南孫」張なすったとこは至極いゝね

「青渡源」アノ鉄南孫と云ふのはどうした一向見へねへの

「鉄南孫」あいつもこないだわさっぱり出ません

「青渡源」やめたかの

「鉄南孫」いゝへ何やめもせんのさ

「東谷金」あの札はちいさいが能わかる札よ

「中村清」ハイ八官藤さん雑札を一めへ上げやせふ

「八官藤」こりやアだが札だ今近麹五吉でも對面てもこんな事アしねへばかゞしい

「中村清」ナニサわたしのではねへのさ入のだ

「八官藤」富八さん公虎のぼだい札を能く張りてやんなさる事の

「富八」かわいそうにあれも心安くしたからせめての事にと思って出るたんびに少しづゝ張ってやるのさ

「八官藤」わっちの方にもちっとよこしてくんなせへ張ってやろふ

「富八」張るって手間もひまもいらねへはってやるがいゝのさ

「帯庄」ほんに気の毒だねわっちにもちっとよこしてくんなせへ

「富八」帯庄さんは能く永ていの水死のぼでへ札を張ってやんなさるの

「帯庄」何の手間のかゝらん事だから張ってやるがいゝのさ

「芋鉄」コウ中村さん一向出なさらねへの

「中村」どうしていそがしいからどっちへも出ねへ

「源川花師」アノ中村さん田徳さんはどうしなすった

「中村」田徳かへ蝦夷から帰ってからねっから張らねへ

「花師」そりやアほんによろしく云っておくなせいゝコウ鳥八〳〵休て札を一枚くれねへか

「鳥八」上げませふ

「守法拝」コウ山田勇舛の札はどうした

「山田勇」アイござい舛

「守法拝」ありやア能く分る札だ

「かしく庵」モシく蘭花さんしばらくお目にかゝりません

「守法拝」イヤお久しぶりでござい舛

「かしく庵」今でわづぶおばんなさらねへネ

「守法拝」イアもふ年がよったらいけません

「源加」かしく庵さんどうしなすったねっから出なさらんの

「かしく庵」春と秋の彼岸に西方と六阿彌陀を廻る時序に少し売はる斗りさ

「源加」ちっとまたせいを出しなされはいゝ

「大熊」かしく庵さんのはとんだ古い札が見へる

「源加」こんはよくはんなすったけ

「かしく庵」六七年前さ桃花漁父や田中政だの山入専が出てあるいた時分さ

「源加」あの時分のてゝいねみんなよく歩いたね今の様に手前の近所ばっかり張りやしなんだ富八奈良亀もよく歩いたね

「かしく庵」奈良亀はわたしが知ってもよっぽどに

なる
「帰左」書札の大きいやつがよく張って有る
「富八」左伊三が一さかり書て歩いたがどうした
か見へねへネ
「源加」一向出ねへ者が多い佐伊三も出ず三田
の左ア守笄橋の亀麻布の吉久なんぞはさっぱ
りだ
「大熊」左伊三は札もよく張るね
「三ッ橋」源加さんいつも出かけなさるね
「源加」ハイ毎月出ます渡源さんは能く出なさる
がおめへさんは一向出なさらんね
「昆鉄」三橋さんアノ先ばんなすったよし勝と云
ふ札を一枚をくんなせへまし
「三ッ橋」先の札はさしなせへ能くねへ
「昆鉄」夫でも一めへおくんなせへな
「三ッ橋」すんなら今度持て来て
「日比鉄」今度はいつだか知れねへ
「三ッ橋」またくるのさ
「宮埜」三ッ橋さんはおめづらしいのね渡源さ
んはよく出なさるがお前はいつからだ
「三ッ橋」夫だけども是に斗りかゝって居やアしめ
へし用がある
「円子」三橋さんは五年斗りあと迄は方々にあ
たらしい木札が見へたが近い頃はあんまり見
へない
「渡源」ナニサかゝさんの側にくっゝいて居る
からさ
「円子」夫アおたのしみ
「三ッ橋」渡源さんは馬鹿ばっかりいって
「魚釣」モシ円子さん振出しさほを一本呑しま
せへ
「円子」何間だ
「魚釣」二間でございます
「円子」二間入は一本有る
「魚釣」ハテこまったどなたぞめさんかね大多
さん買なさらんか
「円子」いつでもいゝが枚だけにして三間許りも
出る振出しをこせへてくんねへ

「魚釣」ハイかしこまりました急には出来ません
「富八」わっちの棹の先が少しおれたが先許りと
り替へる事はならねへかネ
「魚釣」ずいぶんなるからよこして置なせへまし
「富八」すんならお頼みよ
「魚釣」いつでもよこしなせへ
「富八」八百甚にでも持たしてあぎよふイヤ茅鉄
はどうしたオイ〱茅鉄〱
「茅鉄」富さんなんだ
「富八」おれだ〱一寸来ねへ
「茅鉄」なんだいゝ相談か
「富八」よくも悪しくもねへこっちの頼みたアノ
大去年おめへにあっれへてもらった刷毛な
「茅鉄」ムゝどうした悪いのか
「富八」いんにやこねへだの九品佛で落した
「茅鉄」そいつアほんにどこらへ落しなすった
「富八」何でも九品佛を張る迄はあったが星の井
戸のめへで何か落た様だっけ其時だらう
「茅鉄」夫程知てるならひろったればいゝにのん
気になんなすったの
「富八」其時きやア知れなんだか大かたそうだろ
うよ
「茅鉄」何んにもならねへ
「富八」夫だから又頼むぜ
「茅鉄」よし〱先の通りかもうちっと大きい方
かよかろふ大札張る時困るから、頼んであぎ
よふ
「富八」いゝようにおめへ注文して頼んでくんねへ
「茅鉄」何さ先が承知さ
「松彦」富八さんおめへ先はった鳥安と云ふ札を
おれにやアくれねへの
「富八」どうだいなかアやろうか
「松彦」くんねへ
「富八」さア是か
「松彦」なんの天じやアねへワナ鳥居許りのよ
「富八」これも夫たアな
「松彦」ムゝそうか夫でも下におめへが付いてる
から夫れしやアねへと思った是りや下の人が

ねへ方がいゝ
「森傳」さふさね上計りの方が人が知ってる
「富八」夫だってを下におれがいねへとだれもおれの札だとア思はねへ
「森傳」夫りやアそんなものだ
「松彦」そうさそうしねへと元服ったのと今襄るのかわからねへの
「富八」夫だからの事よしよせいがあるもんか
「松彦」巽巳の公三味せんの撥の付たのアあるか
「巽巳の」撥のがござへまさん駒の方かこせへやす
「松彦」駒ならおれも持てる
「源加」コウ巳の〳〵おれに駒のを一枚下せへ
「巽巳の」ハイ源加さん一と云ふ字の札は今日はこざへやせんかへ
「源加」有るだろう
「巽巳の」ござへますなら一めへおくんなせへ（ま」
「吉原京志」モシ源加さんわっちにも其ぴんを一めんおくんなせへ
「源加」サア〳〵

「宗山人」源加さんコレ見なせへ上疰をもらって來た
「源加」どれ本に内に居たか
「宗山人」内に居たかよう〳〵もらって來た
「大々幸」宗山人さんは能く古い札をお集めなさるネもふよっぽど集りましたろふ
「宗山人」どふも古い札はすけねへのさ
「大々幸」さうさそんなに古い人が出ねへからさ古くなくても出ねへ者が多い麻布の三省だの華の烏だのと云ふと一向出ねへ夫よりか鳩谷の内へいきなされはいゝ
「宗山人」これへだにいかふと思ってる
「赤円子」見なせへこねへだすって來た（出して見せる）
「宗山人」わっちにゆづってくんなせい
「大々幸」円子さんは一めへある
「宗山人」是りやア直に貰ふ〳〵
「円子」とんだこった夫りやアおれが骨を折って摺たんだからやられねへ

「宗山人」本にするもよしこいつァありがたい
「円子」夫りやアどうもならねへ
「宗山人」なんのまたすって來なせへな
「円子」いゝ事をいふの本に内にあるのをやらふ
「宗山人」なあにまアおれが貰らふ
「円子」夫りやアどうもやられねへ
「宗山人」なんのと逃げる
「日比鉄」宗山人さんどれ見せなせまし
「宗山人」なんの置てくれ
「円子」日比鉄とってくれねいか
「宗山人」モタおれが手に渡ってはやらねへ
「円子」そんならとろふか
「宗山人」とって見なせへ
「円子」どれまちなせへ日比鉄これを預けるぜ
（ふところより札を出し渡し）
「日比鉄」なんのをきなせへまし
「円子」見なせへとって見さると（へをつかけるひとりの男にげるをおっかんとをつかけるにげる男のふところより何かをちる）夫れ〳〵

何か落たぜ
「宗山人」落てもいゝ
「円子」ひろふぜへ
「宗山人」とり替へよふ
「円子」此きせるとか取替へよふ〳〵
「宗山人」ナニ札とよへとふところを見て）オヤきせるを落したばか〳〵しい天鳳孔平の札一めへで銀の喜世留と取替へちやアそんだ
「円子」それでもとりけへるといふじやアねへか
「宗山人」サア〳〵けへそうから喜世留をよこしなせへ
「円子」マアそっちのから
「宗山人」ほんにひろったのか
「円子」ひろはねへでさなからふ
「宗山人」ねへ〳〵ばてなをとしたわ〳〵サア札をけへそふ
「円子」よし〳〵見せへとらアよふはねへ
「宗山人」きせるをけへしなせへ
「円子」きせるかいんにゃねへ是見なせへ（とふと

ころを見せ）札計りたサア持ていきな
「宗山人」是サじようだんなしに今に御遷座だ
「円子」見なせへきせるはねへおらアしねへよ
「宗山人」なんの知らねへ事があるもんか
「円子」かわいそうにそんならけへそふかコウ大
々幸さんけへしてくんな
「大々幸」い丶奉公よ今迄でいじにして持ていた
「八官藤」落しでもしるとい丶つらのかわた
「大々幸」サア〳〵宗山人さんたしかにわたしたぜ
「宗山人」よし〳〵円子さんめが大さわぎをやら
せた
「円子」なんのすきでしてからに
「八官藤」若いうちはさわぎてへものよ円子さん
もまたわかいからむりもへ
「円子」又なとなしくもねへ事を云ふ
「日比鉄」藤さんそんな事をいふけどもおめへもま
だ若いよ
「秀知」わかいとてかまたはかはへねへ
「日比鉄」そしてなあだな事があるせ又ばかばっか
り云ふと思って
「秀知」そふ〳〵持ち場にほんになしみがあった
っけ
「源加七」ほんとうかとうりで愛宕へよく出る
「八官藤」ありゃアいとこさ
「秀知」おらもナア日比鉄あんないとこがいくら
もほしい
「日比鉄」さうすると京橋の讀書丸と三藏園を運ひ
でとって呑まねへけりやつ丶かねへ へ大勢群
集の中て大さわきをやるやら又こっちでも取
替るあちらでも取替るあっちこっちと四方八
方數た人がこそって噺をするやら取替るやら
の中にわおつかけて札を取る其さはぎを見て
「参詣のばアさん」モシ〳〵有がたいお札なら一
枚とうぞいたゞかしておくんなさいまし
「又一人ばアさん」わたしにもどうぞいたゞかして
おくんなさいまし
「富八」コウ藤さんこ丶へも一枚あげてくんな
「八官藤」だれだ

「富八」コノおばァさんよ
「八官藤」べら棒め
「秀知」そんならわたしが上ゲよふナいればほふ
ふのかるい御札ね是はねまめになるお札さと、
むせふにやる
「参詣のばアさん」わしにも一枚をくんなさいまで
にいたゞかせたいと へあすこからもこ丶も〳〵
といふと
「日比鉄」秀さんほうそうのかるいお札をおめへ
早くいたゞけばよかったに
「秀知」またじよだんをいわふと思って
「日比鉄」なせならばそうすると其こっくいかす
くなかったろふに
「源加七」夫りゃアおれもいたゞけばよかった
「雪月亭」ほんにうさアねへ
「源加七」いたゞかんでよかったかも知れん
「日比鉄」さうさ秀知があゆかるとなほをもしろ
かろふ
「秀知」コタおばアさんあの丘分ざけへきの人は
まめになるお札をたんと持ってるいたゞきな
さればい丶
「日比鉄」なんのわっちやアもたんあの人が石猫
の札を持てるがまめになる札だをさっきいっ
たもれへなせへ
「青夜源」ばアさんうそだ〳〵早くまいんなアノ
札をいたゞくと口ばかりまめになってこまる
「源加七」こいつアちげへねへ
「アミ笠」アハ丶ト大わらいゆききの人も何とも
かてんゆかずふりかへり〳〵見る人もあり立
とまって見る人もあり聞く人もあり種々無量
程なく大師の御遷座お通りと参詣の老若男女
さわぎ立てなくしずまり伏し拜む

此遷座後の光景を次編に書着わすか故に参
拜の輩の名も過半書きもらす見る人に此輩
ありて人名の足らさるをそしり給ふな

晋　哉　散　人

乃げんとなた万

芝源助町に住み浮世絵の頭彫の名人で題名を「天下一乃げん」と云って天保より慶應へ掛けて巾を利かした乃げんと同じ札仲間で貼屋萬吉と迄云われた程神社仏閣を貼った両國米澤町の錦屋萬吉題名を「なた万」と云ふ、此人一生の内に手前の札を禁制場所の安藝の宮嶋の廻廊へ張りたいと云ふ詰らぬ事を思ひ立ち、一度出掛けたが見張りの喧しいので張れず二度目も駄目、三度目も又駄目、今度こそと出掛けたのが櫻田の騒ぎがあった、萬延元年四月の中旬、又性も懲りもなく宮嶋へ出掛けた其れより二ケ月も經った頃、乃げんは成木の板屋へ出掛けて歸り途、芝山内迄で來たフラ／＼と所もあろうに芝の御霊屋へ紛れ込んだ、増上寺の向って右の切通し、六代七代の御霊屋の脇に蔭簾張の茶店があって御霊屋の番人と結託して銭を取って見せたと云ふ事もあったから、徳那傳手で入込んだと思ふ尤もあすこは増上寺の本堂を中に左手が二代様右が通りを隔て、六代七代様になって居る二代様の方は中々嚴重で這入れぬが、六代七代様の方は取締も緩かである、乃げんは宮嶋へ札張りに行ったなた万の事を胸に浮んだ、こんな素晴しい貼場所があるのに宮島くんだり迄一度ならず二度三度無駄骨を折りに行く奴の心が分らない、一番奴の鼻を明してやろうと前後の考へもなく懐中より取り出して、「天下一乃げん」の札手拭をまるめて水盤の中へ突込み絞って置いて札へのりをつけたのを上にして門の額縁を目掛けてポンと投張りと云ふ奴美事に文照院殿の額縁へ札は残って手拭は手許に其れを懐中へ入れて元の道より出て我家へ歸った、五六日すぎて乃げんが守田川町の木戸迄來るとなた万に逢った
「乃げん」ヨ、今歸りかどうだ今度は
「なた万」面目ない又無駄だ

「乃げん」幾度いっても張れぬ場所は矢張り駄目だ宮嶋くんだり迄お百度を踏むのも馬鹿／＼しいや
「なた万」お前の前だが四度迄行ってまだ張れぬと云ふて仲間へ對して外聞が悪い、乗かゝった舟だから張る迄何度でも行くつもりだ
「乃げん」夕カ両國お前だから噺すがおれは五六日前に芝の御霊屋へ這入って張って來たぜと噺ず、なた万もほんとゝ思はず其まゝ別れた此乃げんの事が案外に早く評判となり、これが岡ッ引の耳に這入ったから堪らない直ぐ御霊屋を調べて見ると立派に乃げんの札は張ってある、ソレッと手配りをした札會の席場永代橋の高尾茶屋より連れられ、三宅島へ流罪となる、押送り舟を見送りに行った千社の連中に又今度は人の行かれぬ所へ張って來るんだと云ふて行った、慶應二年十四代の公方様が御他界の時御赦になって歸り其れより御霊屋乃げんと呼ばれて千社の方で大層巾を利かしたそうである、又なた万も懲りもなく宮島へ足をはこび明治十三年五月八度目にて題名を宮島へ残し本願成就をしたのである。

鴻屋天愚孔平

孔平の先祖は小松内大臣平重盛にして始め杉原と稱し後萩野と改める（勢州萩野村より出し故）之れ萩野姓の始めなり、萩野河内守役房は水戸中納言承璟公の臣にて禄四千石を取り朝鮮へ使者して歸國の際黄金の観音像を持ち歸り勢州萩野村に祭つる、是れを萩野観音と名づく、故ありて房重の侍草野と改め房信に至り又元の萩野姓に房る、房信は元禄六年六月十五日始めて雲州松平家の第三代隆元院綱近公の侍醫として召され、嗣重信も父の後を承けて江戸赤坂の藩邸に御側醫として仕へた、（享保三年命により玄春と改める孔平の父なり）孔平は寶永四年五月廿九日江戸麹町

平河天神前に生れ幼名伊三郎後喜内と改む、諱は信敏字は求之、又は㯃谷と號し天愚斎孔平と稱した（妻は藤堂和泉守の侍醫宮田良運の娘なり）伊三郎生れるに當り父は故ありて公邊へ届出を十年怠り享保二年に始めて出生の届をなす。伊三郎長ずるに従ひ侍醫を以て勤める事を嫌ひ自ら孔子の子孫なりと言ひ出し儒者として世に立つる事を思ひ煉に心を寄せる、全體なれば醫者の子に生れて醫業が継げない者は扶持を離れるべきなれど父の功により、延享元年三月廿日始めて藩臣として出仕したが、松平家には儒者として江戸邸には宇佐美恵助あり、御國の出雲邸には桃源藏ありし故、儒者として身を立てる事が出来ぬと諦め、厳格な徳川時代に飽き野心の機会がないを悲んだ結果遂に奇行を以て自ら天下に名を廣めようと考へた者と思ふ、納札の始めは宝暦六年正月、若殿様及び駒次郎様御疱瘡の時伊勢太神、江州多賀の両社並に武州疱瘡神へ御代参仰付られた時、両若様の疱瘡送りの札を納める、其後天明二年六月宗門奉行信神掛御頭役仰付られ之れより神社佛閣へ詣で天愚孔平と號して題名す之れ納札の中興とする、其頃見返り醫者、亀の甲醫者、天愚孔平とで

三奇人と云はれた、見返り醫者は総髪の老醫杖をつきながら四五間行く毎に跡を見返る癖あり、亀の甲醫者は亀の甲の形したる笠をかぶりて江戸中を歩きし賣薬の老醫なり、孔平は晴天に破合羽に草鞋ばきにて神社佛閣へ詣りしと云ふ、孔平は藩の侍講宇佐美恵助について學び碑文を作り又は書する事を好み、其頃の本の序文を孔平が作るか書けば其本は早く賣れたとの事である、孔平の藩録高は加米五十俵を入れて百廿石を取る文化十四年四月一日江戸赤坂藩邸にて歿し、下谷北稲荷町曹洞宗泰宗寺へ葬った、佚山院㯃谷求敏居士、因みに同寺は明治卅九年に北豊島郡巣鴨字染井（今東京市豊島區駒込六丁目）へ移轉したれば墓も同所に在ず、墓の文には百有一歳歿すとあれど孔平の所謂の内百五才と入れ有る印あり、余亦所藏の孔平が自書の畫讃軸物には百六老と書せり、左に

橋容不爽出於至誠　萱堂日親肖儀愈精
只惟孝子陟岵之情
百六老㯃谷敏題

只惟孝子陟岵之情
百六老孔平敏題

文化十三年八月不昧公は月譚公に國を讓つて大崎の別邸に茶事を樂まれて居たが、出雲玉造へ入浴の為江戸を發して途中三河國額田郡岩津村の大樹寺を詣でられた、此寺は永祿三年五月今川義元の訃報に接し徳川家康公此寺に立籠り織田信長の軍兵と戦争をした所で其時寺門貫木を堅く閉ぢて敵に抗し機熟するを待って開門突戦遂に捷ったと云ふので此貫木が當寺の什物の随一となって居る、不昧公は直政公の後裔で東照宮の血統であるから曩祖の武功を聞かれて九十一言を書て與へられた、之れも現に同寺の寳物と成て居るので、孔平は此れに楷書し百有十歳と記されてゐる。

松平不昧公の九十一言

永祿之間

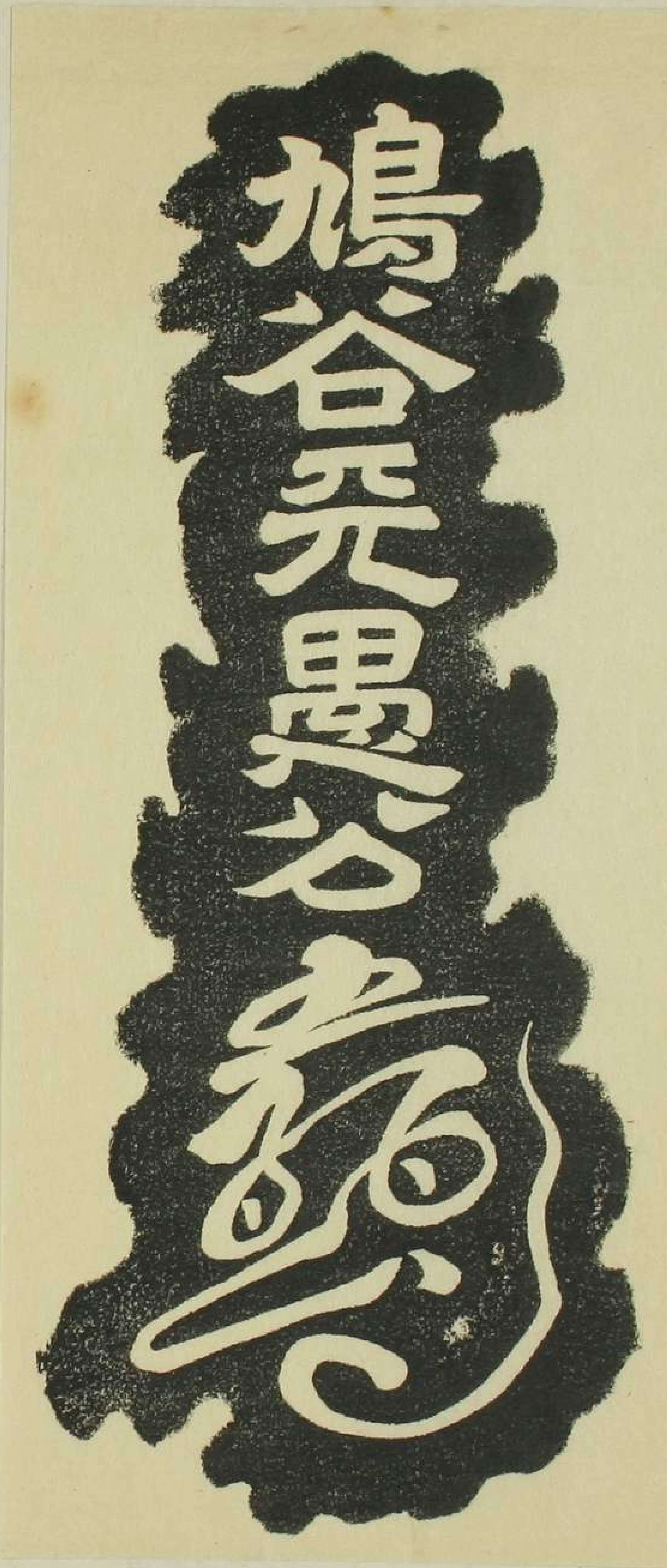
國家多難大樹寺役危　急最甚記載悉矣當時
門貫今尚存龍野刀痕　顛然螢鑫之難介汗之
勞　誰不恭熄實
國家之神蔵也創業最難　守成不易居安慮難
處　治思乱夫箴子哉家人　幸属渓末時不勝
感慨　順援筆陳情矣
文化十三年八月十七日
前出雲國主從四位下左少將
源朝臣松平治郷　題　印印

九十一言の箱書

三河大樹寺古門貫我太公一見嘆祖業題九十
一言時歳六十六住僧評謝珍重請使左右記其
由臣信敏百有十歳感類而命之即如以右云爾
文化十三年秋八月晦日
出雲國鳩谷天愚老孔平信敏恭撰

之れに依れば孔平は百十一歳にて歿せし者なり、届出を十年息り享保二年に至り出生届をせし故墓文は其年月日を入れたる者と思ふ、享保二年より文化十四年迄年號を數ふれば百一年と成るが孔平我身の歳は百十一歳にて歿せし事明なり、今之れに舊出雲藩主伯爵松平家の藩臣の官歴を記したる列士録の内より孔平が始めて藩臣として召されてより歿せし時迄の経歴及び小松内大臣平重盛よりの系圖を左に掲げる。

萩野喜内信敏　生國武蔵
一延享元甲子年三月廿日御初勤仕被仰付
一同十二月廿六日出精相勤付而御小袖一金千
足被下候
一同三丙寅年六月七日御居従見習被仰付御上
下一具被下候
一同六月十八日喜内與改號被仰付初名伊三郎
一同十二月廿八日爲御褒美金一枚被下候
一寛延元戊辰年八月廿五日御居従本役被仰付
金十両並百石分雑用銀装束代銀等被下候
一同二巳己年六月十二日千代松様御誕生之節



孔平墓石搨の寫

御召神伏物御通方被仰付相勤付而爲御褒美御
目録被下候
一同三庚午年十二月廿九日出勤相勤付而爲御
褒美御手自御小袖一襲下候
一寶暦五乙亥年四月十八日當冬御上京之節御
供被仰付、同十一月御供仕京着、同十二月
御供歸着
一同十一月廿一日於熱田駅江州多賀社へ御代
参被仰付
一同六丙子年正月廿六日若殿様（不昧公）駒
次郎様（不昧公之令弟）御疱瘡被遊候ニ付
伊勢多賀両社並武州疱瘡神へ御代参被仰付
一同八戊寅年四月二日病身付而御次之方勤難
仕趣達御聞御居従御免御廣間勤仕御雇被仰
付病氣本復之上者御居従可被召仕之旨被仰
渡候江戸御居従番組へ組入
一同十庚辰年十二月朔日父家無相違一百石被
下候
一同十一辛巳年九月十五日父之勤功且御馴染
之者付而格式組外被仰付
一明和元甲申年十二月廿八日御廣間方並御使
者等出精相勤付而爲御褒美銀三枚被下候
一同二乙酉年五月廿三日就合皆勤爲御褒美御
上下一具被下候翌戌年七月十一日茂同様被
下候
一同九壬辰年六月二日御番方皆勤付而爲御褒
美御上下一具被下候
一同八月十六日御隠居様（天隆公）附御納戸
並御側醫御雇兼勤被付同日哥木殿御用請へ
兼勤可仕旨被仰出
一安永六丁酉年八月五日御隠居様付御納戸並
御雇御側醫御免
一同八己亥年四月廿六日皆勤付上下一具被下
候、翌子年五月十八日、翌々巳年四月廿日
茂同様被下候
一天明二亥寅年六月朔日御頭役被仰付宗門奉
行鐵砲改御関所通手形判形役被仰付
一同七丁未年二月廿七日川々御普請御手傳被

蒙被御用懸御役人公邊へ御書上有之付而右
書上可被差加旨被仰出
一同六月廿六日関東筋並伊豆國川々御普請御
手傳御用相勤付而於御本丸松之間白銀十枚
時服二羽織一拜戴被仰付旨水野出羽守殿被
渡候
一同八月七日御公役無御滞被爲済御上下一具
被下候
一寛政六甲寅五月十七日此度関東筋川々御普
請御用被蒙仰付御役人公辺へ御書上有之ニ
付右御書上可被差加旨被仰出
一同十月十五日此度関東筋川々御普請御用相
勤付於御本丸松之間白銀十枚時服二羽織一
頂戴候松平伊豆守殿被仰渡候
一嫡子彦一郎寛政十一己未年六月廿三日被召
出二十石五人扶持被下候格式組外御側役見
習被仰付
一同十二庚申年八月十六日新番組支配御書方
兼勤被仰付手前抱足軽二人被下候、二男岩
蔵享和二壬戌年九月八日被召出九人扶持被
下候御手様方附御抱守本役被仰付
一享和二壬戌年十二月廿五日出精相勤付而御
役料百俵被下候
一文化二乙丑年閏八月廿日御番頭格被仰付御
役料五十俵加米被成下尤及老年儀御書方兼
勤御免
一同十三丙子年七月二日如奉願隠居被仰付唯
今在之加米爲隠居料被下候
一同十四丁丑年四月一日於武蔵死

萩野家の系図

小松内大臣平重盛——新三位中将資盛
杉原季盛——光衡——親行——行廣
末廣——基實——廣村——眞昌
常昌——常勝——教廣——常任——勝久
久長——敏定——敏信——家利——家次
長房——重長——長俊——萩野河内守俊

房――草野隼人房重――萩野隼人房信富春
菴――彦一郎重信菴――
喜内信敏（鳩谷天愚孔平）――
彦一郎信龍（幼名欽二郎）――
彦一郎平暉龍――小松龍風（幼名六之助）
孔平（當主）現大阪に居住せらる――

孔平と其碑撰文

天隆公壽像碑

孔平は出雲國主第六代天隆公の信任を得ていた事は安永七年三月天隆公五十歳の時出雲松江月照寺（國主代々墳墓地）に壽像の碑を建てた時に孔平が其撰文者であったと云ふ事でも能く知れる此時有司の者は孔平の學識を疑って撰文者たる事を好まなかったらしい其碑文の終に

我天隆公命臣信敏撰此碑文也臣嘗見國史之記有司不許臣恐惶不知其竟而無復奈何勉强從事自恐故事實歳月至時人姓名職主皆訪求以參見聞撰上而謂正臣恐惶不安有司曰悉合史之記則臣始安尚恐多誤謬公召見賞其勞也云々

と書て有る當時孔平が異言奇行を以て有司に容れられなかった事がわる此壽像の碑石は丈餘の大石柱で台石には大きな亀が造ってある、碑文の文字は今や所々剝落して居るけれども其筆力の遒勁な所は歴々として見られる

天隆公退筆塚

安永七年四月廿七日天隆公の退筆塚を東京芝邑西之窪天德寺に建てた其文を孔平で有る書は豊州杵築の藤山惟熊と云ふ人である其文に曰く

出雲天隆公退筆塚碑文

臣　孔平信敏　謹撰

天隆公之好書周日揮毫不倦四十年于此矣

退筆積久如堆及東西爲壽藏公謂管城子久勞於事可其憐也寡人已有永夜之室則之子亦不可無耶安之居國座之東都壽域之右其上自題曰退筆塚先是封内壽藏成建碑神道臣信敏奉命撰其文東都寺告成則有司請建碑記事公曰止寡人不肖一旦有差亦無復言有司愚焉謀之臣信敏信敏曰公之盛德封内有記是以神道無碑庸何傷若不聽則已矣信敏幸與筆之役竊識之其陰云爾

安永七年夏四月廿七日

豊州杵築　藤山惟熊　書

釋迦嶽の石像

東京深川八幡宮本殿の後ろに釋迦嶽の石像が有る去る大正大震災の爲本殿末社及社務所其他全部燒失すれど幸に此石像は壞れずに有る其撰文に

出雲釋迦嶽雲右衛門長七尺五寸石象表本

天明七年春二月判天建置弟直鶴右衛門山川醉氣斯出大人身長丈餘膂力絶倫角觝相撲嗚於深川一朝化去姓名尚傳空存其地予弟消魂建石象形表於萬年

鳩谷天愚孔平信敏撰　赤峰劉長和書

出雲釋迦嶽雲右衛門長七尺五寸石象表本右後十三年永義建焉閭里孔信龍伯鮮頒言

東魯孔信鳳仲翼書揮

桃源藏七十壽

寛政三年出雲の儒臣白鹿桃源藏七十の壽宴を開く東都の諸名士多く賀辞を寄す、孔平も亦壽に賀して曰く

白鹿桃先生仕我藩、專任學政、而教化曰行、先生在封内、余居國邸、相距三千里、亦聞其隆盛、六十初度、余賀而述壽、今茲男義、例役於國邸、常相親、善問其學、子則曰、縣孤也久矣、既能誦詩、問其修

行嬉哉、則無名後秀世、周還言志、則君義業進於昔日、行義精忠進於修學、學教日行、政化隆盛、猶德之不修學之不講、斯以為憂奮無君子者、斯焉取斯、將謂無是父無是子、無是子無是父、家庭之教化遙觀其隆盛矣哉、君義曰、七十初度在茲月、將為此春酒以介眉壽、願仍舊辭、余曰、教化之行如昔日、家庭隆盛如今日年彌高而德彌邵者非耶、南山之壽、松柏之茂、天保定而永錫難老、仁者之壽何名、如岡如陵、其誦詩而後秀者、班々奉觴、君義例役而化延及國邸、則必怡々、何辭之能陳、且余昔日贊述無已、附以今日之言、竊表我志、而全其稱、乃記以為叙、

右奉贈君義桃文學

孔平信敏頓首

桃源蔵はもと石見の醫者の子であったが神童の譽があって叔父について十四歳の時江戸に出て浅草の札差桃東園の養子として昌平黌に學び天愚孔平の父春庵の推薦に因て松江に赴き出雲最初の學校たる明教館の教授となり、かねて不昧公の侍講となった人である故に孔平と源蔵先生とは既に江戸に於て知合の仲間で有ったらう、又源蔵の養子君義は修學の為め江戸へ出ていたので此れ共殊に善き仲で有った其れ故源蔵七十歳を祝する為に右之文を書いたので有る

小野宮廟碑

府中本宿字小野宮鄕社小野神社に孔平の撰文になる小野宮廟碑が有る余が調べに行った時は前年の大震災の為に碑は壊れたまゝであった

小野宮廟碑

小野宮者在武藏州多麻縣小野村在昔安寧天皇使兄武自命國造此州兄武建府於此肇置祖廟於此地兄武者下春太神之後二井諸

忍野神狹命九世孫下春者天孫隨駕三十二神之一而威靈之最也遂稱縣曰府中號一宮時謂洲為國謂守為造謂廟為宮謂為一皆古言也小野元縣名府中曰縣而小野月隱地廢多麻縣而名僅存於村落耳益上古式神名帳為古廟也明舍旁有枯株周圍十尋許其上可坐百人藥枝高聳摩天殆乎有二千餘歲之想為故地也明舍創降建置爽古焉舊制威靈憧於此宜也四方祈禱感應有驗内藤子章名重喬好古善監今茲傷其哀修廟勒碑使余銘焉長島危俟筆篆碑面銘曰鐘靈創祠二千餘年志士勒碑不朽是傳　寛政七年九月望日出雲國下太夫江都鳩谷孔平信敏撰男信龍沙筆次信風修約長嶋危人藤原巖恭書内藤重喬肅建

玉川の瀧碑

享和二年江戸赤坂藩邸内にある有名な玉川の瀧の修理が出來上った當て寶暦二年伏見貞健一品親王が此滝を見て（繰返し見ても幾千代玉川の流れの末の瀧の白糸）との和歌を遊ばされた所で玉川の水を引いて園内の瀧とした名高い庭園である、安永八年秋の大雨で荒廢したのを不昧公が修繕されたので其時江戸の丹波六箇が碑文を作り瀬斉久世道空翁が書で玉川瀧の碑が建てられた孔平は其碑の陰に

園之奇勝、碑文盡矣、非世無奇勝、唯幽深之趣、如此園、則天下稀、其成焉矣、誰種樹、山道彌次矢衛、奉命從事、無一不得其意、時稱名園、詩云、他人有心、我忖度之、是此謂也、乃命題碑陰、可謂小物不遺哉、彌次、西郊中谷之人也

享和壬戌之穐　臣　信　敏　撰

と書て刻り附たのは孔平の得意と思ふべきである、此玉川の瀧の跡は、赤坂見附閑院宮殿下の御邸となって居る玉川滝の碑わ今は伯爵松平家の御邸の庭にある不肖碑を拜見に御邸

へいった、碑は孔平の文を前に何け丹波六簡の文は裏向きとしてあった、此碑を見ても私平家と孔平の事がわかる孔平は二代に仕へた即ち天隆公には延享元年から天明二年逝去まで三十九年間不昧公には襲封の明和六年から孔平の監死、即ち文化十四年（不昧公の逝去一年前）迄四十九年に成るとにかく天隆公御幼少の時から不昧公には殆と一生を通じて御仕へ申したのだから其間にはいろ〳〵の面白い奇談がある．

孔平の頓智

不昧公は自ら禅學茶道に精通し又國内に於て武備の奨励國産振奨等に因って中興の名主と仰がれた大徳雅量の名君で有ったから臣下皆悦服してゐたので有る、所謂諸臣を使ふに適才を適所に用ひられたのだ、或時聖堂へ献上物をすべき事があった有司の者はどうした譯か其日を忘れていたので、よほど時刻が過ぎて氣が付いた、さあ大変此れが出雲藩の落度となってはと非常に心配した事があった、此時不昧公は孔平に此事を扱はせよとの御諚であったが孔平は得たり賢しと直様献上物を携へて御茶水へ出かけた、果して諸大名からの献上物は既に受納されてしまった後である、から役人に云ふのに、私は松平出羽守の家來萩野喜内と申す者で御座るが今朝早く屋敷を出たのに途中腹痛が起り已むなく知人宅にて静養して、やっと直り唯今參上致して御座る何卒此旨御推察下され献上物御受納の程願ひ上げ奉ると、役人は罷りならぬと一言の下に拒絶したので喜内然らば私儀に於て覺悟を致すで御座らう、私の此の發病の故を以て我君に落度をとらせまいらす事は臣下として忍びぬ所である、いざ此所で自害致すで御座る聖堂を汚しまいらす罪平に御免候へと諸肌ぬいで既に覺悟の體と見へたので役人大に驚き然

らば定刻前に献上相成りたる様取扱ひをくべし早々歸られよと、いったので首尾よく使命を果して歸りきた、孔平は頓智に長し又奇行を以て江戸中に知れ渡ったのであるから幕吏の中にも孔平を知らぬ者はなかった。

孔平酒を愼む

孔平は或時泥酔して紀州藩邸に入り大音聲を張り上げて、我れは楠多門兵衛成りと玄関へ仁王立となってわめいたので邸内の家臣は驚いて出て見ると出羽様の家來荻野喜内であるから、例の天愚だ〳〵と云って誰も取りあふ者が無い、天愚先生け門側の籠部屋で寝込んでしまった酔が醒めて見ると御三家の一なる紀州侯の御屋敷へ飛込んだ事が分ったのでほう〳〵の體で歸りて來た、後日紀州侯が登城の際不昧公に向って貴殿の方には楠正成と同名の御家來を御抱へになって居るかと問はれて不昧公は扱ては天愚の一件だとすぐ悟られて、孔平を庇護する為に即座の頓智で楠多門兵衛と云ふ者は候はねども、楠田門兵衛と云ふ者に候と答へられたので此事に就ては何等の御咎もなかった、此事を不昧公が孔平に御話になると孔平は大に恐縮し、爾來大酒を愼むやうになったと云ふ事である。

孔平十両を取返

或時孔平の息彦一郎が誤て馬を番所に乗入れた為に其番吏に金十両を賂って事済となった、此事を歸り父天愚に話すと、父は大に彦一郎を叱責し、汝は馬鹿だ乃公が其金を取り返してきてやらうと矢庭に馬に跨り御番所さしてわざと馬を乗り入れたすると例の番卒が誰何して國法に問ふと叱りつけた、天愚は平然としてよし〳〵今に十両遣るからと云ひながら敢て馬より下りやう共しない、悠々鞭を

あて、そこらを乗り廻すので番吏は気をいら立って馬の轡をとらへて制馭しようとする途端不図と顔を見合すと江戸中に鳴り渡って入る天愚孔平で有ったから驚いた此天愚に已れが十両の賄賂を取った事がわかると彼の事だから諸侯のだれかれの別無く言觸された日には自分の破滅だと恐る〳〵十両を出して、何卒此事は御穏便に御願ひ申ますと再三再四謝罪した、天愚先生意気揚々として引上げた。

女嫌ひの孔平

南海公は豪放磊達の性質で度々吉原へ通われ華美な遊びをなされ、常に孔平が御供をなす、南海公には廓の物を食する事を嫌ひ屋敷より葵の紋付たる磨たんすを用意し、其中に器物を居れ料理人にこしらへさせて食べられた女郎屋より出たる料理は主人の名代として孔平は腹一ぱい食し、女郎より此名代を喜び居れり、又不昧公も雪見の時縄暖簾へ飛込み葱鮪を賞翫して今日でも講談の材料と成て居る、寛政の改革に白川楽翁が大名旗本の吉原入りを禁じた時、十八万六千石本格の行列で吉原へ繰り込み白川楽翁に面當をした事もある。又奥州二本松の城主丹羽左京太夫閑如入道の妾の縁により入道に懇に出入したり、入道は孔平を粋にせんと或る時吉原に召連れ二の町と云ふ女郎を揚て二人を部屋に入れたれば床には寝たれど我れは孔子の裔なり遊女なぞに身を汚すは孔子代々の遺戒なりとて用をなさずに歸りたり、入道我等三百両を入れても孔平を粋にせばやと思しに遂に粋にならずと笑れた、

孔平が申すには長寿するにはまづ湯を使はず熱物を食せず女を慎むが第一也、又爪を取る日を六と九に定め六の日には手の爪を取り、九の日には足の爪を取る是れも養生の一つなりと申せり然し孔平には子供は男女合せて

九人あったと云ふから女を嫌ひ女を慎むは少し疑問である。

神佛千社参札張等停止

（徳川禁命之内より為参考寫す）

近頃神社佛閣千社参りと唱講中杯を極申合参詣致し札を張歩行候もの有之由神佛尊信致し候迚も講中杯と立茶屋杯へ寄合千社参詣之札を為取替右之内にて世話人等有之右講中之者より銭杯を取集手廣く千社之札を張候を名聞之様に心得候者も有之由よからぬ事に候右類之儀は無之様に町役人共より堅く相制向後心得違之者有之は其段早々奉行所へ可申立候

右之趣従町御奉行所被仰渡候間一組限り不残様早々申通町中家持借家店借裏々之者迄入念為申聞以来右躰之儀無之様堅く相制可候且月行事に而相勤場所は最寄名主共より早々可申通事

寛政十一未年七月

右者奈良屋に而申渡肝煎年番達

納札と俗信（終）

出版者として

伊藤喜久男

金川志ん馬氏が首都に於ける有力なる納札蒐集家であり、且研究家であることは、今更私などが多くを語る必要のない自他共に許された事實であります。氏が先年自費出版された「納札大史」が、おそろしい古本價値を生じ、趣味家の間に珍重されてゐる一事を以てしても明でありませう。然し乍ら江戸ッ兒と切っても切れない密接な關係を有す千社札に關する文献なり資料なりは實に僅少であって、從ってこれの研究家にどれ程不自由をさせてゐるか判りません。かかる意味に於て金川志ん馬氏に懇願し、ここに微力乍ら私の手で『納札と俗信』が惹く生れたことを大變喜んでゐます。この書は去年の夏志ん馬氏と私が出版契約を結び、爾來私のプラン通りで約一ケ年の歳月を以て出來たものであります、志ん馬氏が永年この道の趣味者と結んだ美しい交遊に花が咲き、この書のために、東京と大阪の納札連の顔役が、それぐ＼御秘藏の千社札を、御寄贈下され、本書に素晴らしい光彩を副へて下されたことを、心から深謝申上ます。無論この書の出版に對しては、志ん馬氏も單なる著者であると云ふ關係ばかりでなく、それ以上の意氣組をもつて、なにくれとなく數々の御援助を下されたことをくれぐ＼も難有く存じてゐます。

出版者として約一ケ年の結晶を世の中におくり出すの喜びは、正直私のみが味ふ醍醐味であると思ひます。更にこの感激の波に乘って、出版予告にもあります通り、次の趣味出版の完成に向って、絶ゆみなき行進曲を奏でますれば、今後共大方各位の御聲援を只管御願申上ます。こゝに簡略乍ら一言御挨拶を申述べます。

（昭和十四年皐月の下旬）

旅の趣味會出版圖書目録

伊藤喜久男編輯
旅の趣味 第八輯
半紙判百頁、百三十部限定出版、和裝本仕立、定價金壹円貳拾錢（送料六錢）
第一輯・第二輯、第四輯各賣切。

佐々木庄藏著（旅の趣味第三輯特輯号）
東京探墓案内
定價金壹円五拾錢（送料六錢）（殘本僅少）

北條時宗著（旅の趣味第七輯特輯号）
小繪馬と俗信
定價金壹円五拾錢（送料六錢）（賣切）

金川志ん馬著（旅の趣味第九輯特輯号）
納札と俗信
定價金壹円五拾錢（送料六錢）

高橋源一郎序文、磯部鎭雄編
大東京關係地誌目録
定價金七拾錢（送料三錢）

宮下武太郎編、小山彰、大川如水補修
記念乘車券目録
―昭和十四年度版―定價金八十錢（送料三錢）

近刊豫告

西澤笛畝著 **小繪馬の話**
北條時宗著 **新選繪馬圖集**
伊藤喜久男著 **東京蒐集家大全**

東京市大森區馬込町東二ノ一〇九九
旅の趣味會（略稱T、S、K）
電話大森六四七三番
振替東京四三四四四番

旅の趣味會は伊藤喜久男の主宰するものにして、毎月土俗、考古、蒐集、旅行等に因む趣味誌「旅の趣味」を発行し、史蹟見学、ハイキング、集会等を催し、全國に散在せる三百余名の会員がそれぞれ異色ある趣味生活を営んでおりますれば我等の集團を利用されることに依て貴下の趣味生活をより潤沢なものにされんことを切望いたします。会費一ケ年金壹圓

納札と俗信

旅の趣味 第九号（特輯号）

定價 金壹円五拾銭（送料六銭）

昭和十四年五月二十五日印刷

昭和十四年六月 一日發行

著者 金川志ん馬

編輯發行兼印刷人 東京市大森區馬込町東二丁目一〇九九 伊藤喜久男

東京市大森區馬込町東二ノ一〇九九 旅の趣味會

（略稱、T、S、K）

電話大森-06-六四七三番

振替東京四二四四四番

旅の趣味會

電話大森二四七